



091718-000-2

特11-110

滑稽反古探

此花情史 / 著

M24

DBO-0191





129  
1171

# 滑稽探

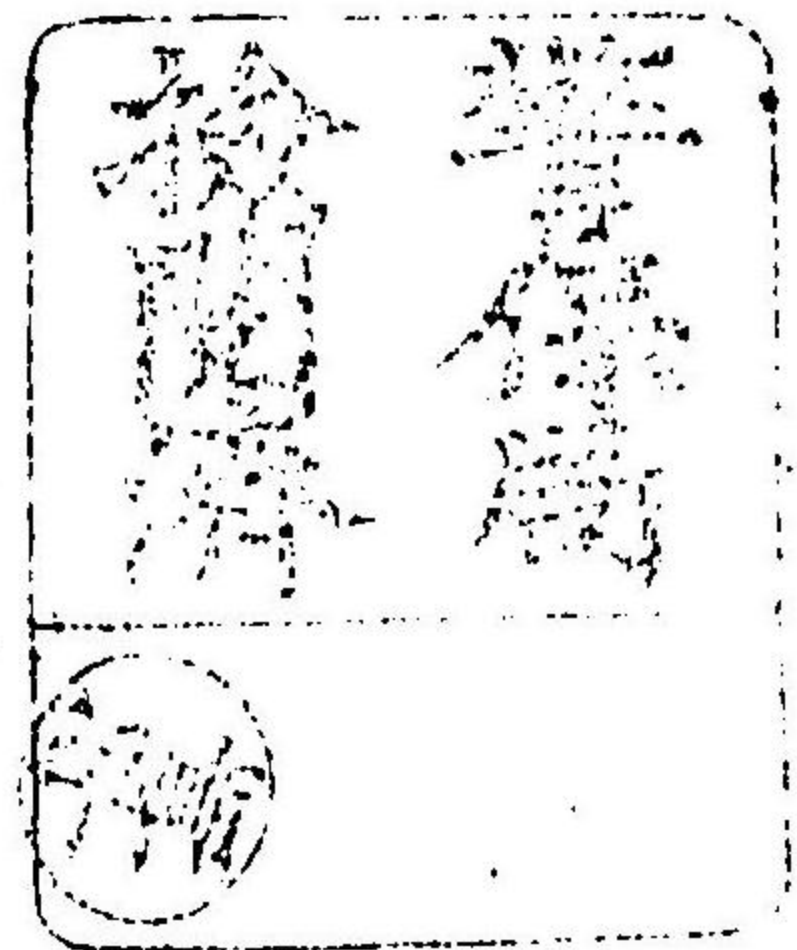
好笑堂

發行



1







滑稽反古探自序

予の本編を著述するに當つて序文を抜く積りなりと其譯奈何とあれば序文と女郎の無心手紙との讀みてトント面白からぬものあればなり然れど序文の著書の附属にして猶る量の鍈砲然に於るが如し故に序文をかき著書の營業鑑札を忘れて出た屑買に似て何となく肩身せまき心地かせは是非忘れたよと友人の勧めに夫も其様かと矢はり舊例通り序文を認めることになりぬ去はとて此を讀と讀ぬの看客の權内にある事にて



面倒とおもはゞ讀ぬも佳也、どうで腐言を記した  
 るものなればかり併し是でも製本屋の手敷の中  
 へ入つたものゆゑ何方かと言へば讀で戴く方々  
 有かたし尤も百中一の愛顧ぶりで序文を讀で下  
 さるゝ素より本編の題號こそ反古探と稱へ中を  
 展讀して見れを珊瑚珠のタマよの堀出しの文章  
 もあらうと思ふて下さる方もあらうが其の直ぶ  
 みの宜すぎた買方よて是は一冊よまとめた本の  
 量目ばかり中ないづれも紙屑同様妙殻めいた娘  
 の戀路あれハ密柑のカハつた薬を盛るお醫師さ

んもあり義よ依て敵討よ出る幫間の役お立ちさ  
 うで立ぬ証文の反古よ比すべく女房を賣て盗金  
 を辨償むとする正直男のチヨツと愁歎場もあつ  
 て濡つた鼻紙の如し又た編中著出す所の談話の  
 種々雑多よして一も類似のかけれど人物のいづ  
 れも鈍馬り變痴奇の顔ぞろひ互ひお我一ど看客  
 の頃を外させむ事を努めたれば何誰も頃の掛金  
 をおつくり下し此口へ紙屑わらひ入るべりらぞ  
 と御用心が肝腎おかりかど、破れ草紙の文字同様  
 何たり分らぬ序文を延ひろける事おりり



明治廿四年九月

芝山内ある香風園に於て

この花情史

志るす





習古画



目録

○ 稗史の情郎に蹈迷ふ  
娘が戀路の病痾つき

○ 江戸の敵を長崎で  
打つ幫間の義俠氣

○ 頭上に宿る女房を賣て  
金子を辨する正直律義

○ 一命を杖に馬鹿か  
峠へ登る山猫退治

○ 妙薬をモルヒ子より  
はげしい醫師のじさき

○ 蜘蛛の巢に碓が引掛つた  
生徒の馬鹿を見る嘘學校

○ 目先の見えぬ俳優の思附  
にのゝ容も呆れて闘場

○ 可笑さに介添人も願を  
おとし話し家の決笑状



○女郎の物語  
 目録終  
 自第壹筆  
 至第五筆  
 八

滑稽反古探



此花情史戯著

稗史の情郎お踏迷ふ  
 娘が戀路の病痾つき

世に戀はど怪しきもの非し石屋の主人箱屋の息子堅い者でも踏まよふ  
 が此の道中に頭提燈を照したはどの人も迂濶轉びて悴の小言を握むも  
 あり然れば妙齡の娘が仇浪よする磯貝の片戀に胸焦すの應擧の龍虎有ふ  
 れて珍らしあらねど是れ又た山陽の畫幅ちよつと異つた娘の戀路わたし  
 て欲しき橋場とやらに金貨を營業とあし最と有福に暮す有山徳右衛門と  
 いへる人ありけり當家の一人娘にてお延と呼ぶの本年どつて十九世間並  
 の娘から下女でも取へて誰がどうぶの斯だのと男子の浮評でもして騒ぎ  
 散す比あるに、お延の男のをの字も言しとあく、知人が來た時も母親が氣を



揉でコレ御挨拶を仕なさらぬかと、ぬちを掛れば漸く機械人形ほど頭を下  
 て挨拶をずる計り、どうも此娘の困り升よと、母親の分疏の常の事、只さへそ  
 れほど溫柔赤ものが、先ごろより気分わるしと一室の内に引籠りて庭前へ  
 だに出ざる故、両親の心配の一方ならず。お前の様にさう内に計り引籠りて  
 居ての猶さら気分が悪くあるからナト庭へでも出て見るが宜い、何日やか  
 前が買ふて来た、アノ秋海棠も花が咲た、また今朝植木屋から白菊の立派な  
 のを持って来たからチャツと出て見るが宜いと、我子を案じて母親が、手を持  
 ながら起す様に勧めて見ても根が生たか、床を離れぬ娘のお延、頭を横にふ  
 る赤の辯でも中々あがらぬ腰の強さ、父親のうれを叱る様よ。コレお延、其  
 許の温厚も似ぬ強情もの、これほど母親さんや秋がいふに未だ其様にし  
 て居るのめ、何故出よと言たらハイとの言はぬ、案ずる親の心も知らず、我と  
 我でに病痾を重らせ、心配させる不孝ものめと、いふに娘も詮方なく漸く上  
 し腰高の障子引わけ椽へ立出で、はく庭下駄も重々ど、其所此所を歩き廻り

て、胸の曇りも少しの晴しか、チラと光りを見せたる笑顔、其機に附入る下女  
 のお清。何とお嬢様奇麗に花が咲たでの御坐いませんか、アノ葱草を御覽  
 遊ばせ大層に芽が出まして、然して彼の何日買ったんで御さいました子、たし  
 か銀座の前田様へ行た歸り道、思ッて見ると反て日数の経過た割に芽が出  
 ないのかも知れませぬ、葱草も葱草だが七種の又別で御さいますねへ、といふ  
 にお延の又た俄に何事か思ひ浮びし容子にて。ア、お清、七種の事、何ぞ  
 言ってお呉でない、種々な事を思ひ出すから、と言つゝ頭をうち垂るに、お清の  
 不審と措寄て。貴女のマア妙な事を被仰での御坐いませんか、何故七種の  
 事を言ふと悪いので御坐い升か、七種の事が何故と、言葉を疊みて問掛るに、  
 お延の愛に返辭も呑れ、愁然として居るにお清の氣を揉み。モシお嬢様又  
 其様にね鬱ぎあさるよ、貴女の何が其様にお氣に懸るので御坐い升子、側に  
 ね附まをして居る妾が案じられて成ませんゆゑ、何か斯々いふ事情だとか  
 明しあつすて下さり升やうに、物事の案ずるより熱が易いとまをし升から



妾へ斯々だとお話しなさるが宜しう御ざいますと、いふをお延の夏蠅とて

十二

や。エー打捨てたいてお呉れ、妾の身で妾が勝手にするのだから、といふさへ荒々しく下駄脱ぎすて我部屋として立入りたり、後に遣りし下女のれ清の。お嬢様の強情赤にも困るヨ、折角私がか案じて尋ねるに妾の身で妾が勝手にする事だからと、ほんたうに強情赤事なるほど自分の身で自分が勝手に苦勞を仕なさることだから仕方がない様もものだが、それで御兩親様の御心配の何なさるか、随分伶俐な方だけれど時に寄ると實に分らない事を仰やるヨ、妾だって何もさう言わなく無いが、御兩親の方で私が側に附て居ながら氣の晴る様に仕て呉ぬと云ぬ計りにかつしやるから私の實に苦しいよ、今日といふ今日、今日の日、疲弊を切したから御兩親に能く申し上ねばならぬと、うち吐きつゝ、坐敷に上り主人の側へ行たりける、主人の爾いふ事とも知らず、れ清の顔を見るより笑を含みて。どうぢやナお延の未だ庭へ出てゐるかナ少しの氣分を直した様うと云ふにお清の膝進ませ。

せ。サア實の其事で参つたので御坐い升、お嬢様も大分御機嫌が好さ相で御坐いますから、かういふ時に悉皆お氣分をれ快させようといふからぬと心得まして、咲やこつた草花の事などを申し懸ますとお嬢さまの、どうぞ七種の事だけい言て呉るおとの不思議を仰せ、それの又た何いふ事でかとお尋ねすと七種といふ事を聞くと思ひ出す事があるからと仰やい升から猶さら不審と其の事情をお聞やさうと致すと夏蠅とてお部屋へ入つてお仕まひささいましたるが御自分で仰やる程事ですから是に何か深い事情のある始末で御ざいませう、旦那様の方に何かお心當りの事、御ざいませんですかと陳出したるお清の言葉に主人夫婦の眉うち顰め。それの又た妙な事だ別に七種といふ事で心に當る様も事件のないが此間川向へ七種を見に行たとき言問團子へ寄るとお延がおいしくと云て無暗と言とひ團子を喰たが若しやあゝいふ温厚な女ごから其の團子を喰たいと思つて苦容く思つてゐるので、有まいかと母親がいふに父親も、あるほど

十三



夫もさうかと思ふヨ七種といふ事を言て呉るなと言へば何のともあれ言問團子を買ひにやるが宜とて是より下男の權助といふ大きな器を持して渡越に團子を買ひに遣りしに問もなく權助の立戻りヤットまかせと擔ぎし包を下して出す山盛の團子之に茶を添てお延の部屋へ持し遣りしが側に人が居ての如彼耻かしがりだから喰ぬも知れぬヒタと襖を閉きつて行ぬがよいと、何から何まで心を配る親の計ひ、今ごろの無を嗜しさうに喰居やうと母親の拔足して彼方へ至り襖の透より窃と覗け、喰る所か顔うち反けて寝る容子の不審しと、其儘室内へ入りてお延に對ひ。お前が好も團子と思ひ、かうして買て來さしたに喰ぬといふの何いふ事情ぢや、お茶も別に良のを入させたのぢや、チャと喰たが宜いと云へばお延の寢返りして。妻の氣分が悪いゆゑ斯いふ物の喰たくさいと手を差延べて突やるにぞ、借の團子でなかりしか去どの無駄も心配したと、後悔しつゝ、此方へ來り、夫へ云々うち告るに主人も夫の失策たりと、頭を掻も可笑けれ、かくて両親

の團子でいといと仕て見れば何いふ事か猶さら不審と、胸に手をかきて考へ見れど是と思ひ當る事の無ければ詮事なしに其まゝ日を過すうちお延の鬱氣のいよく募り中々床を上られ相も無いより両親の尙さら心配して、どうした病状かと醫師に問へど醫師も聞て分らぬ病名を言て胡麻くわし居る計り、是の若しや世にいふ方祟りとかにての非ざるかと、當時流行淺草馬道の實相堂と呼べる賣卜者の許へ行き、うらみ貰ひたるに賣卜者の筮竹を机の上に投て笑ひながら。コレのお前さん方祟でも何でもかいい併し此の病の起りのナト口外仕兼るが、妙齡の女がわづらふ疾病で名が言へぬと聞したら大体わかりませう、ぶから何にも案じる事な、歸つて其の合藥を探せば直に快る事ぢやと、言れて母親も初めて夫とさとり早々歸つて來て事の次第を語るに、父親も借のさういふ事情で有たかど大きき喜び、それに仕ても誰に此事を聞させたら宜からふ、お清でも悪し、ト言てまた親の口から聞くの猶さら、ハテどうしたら宜からふと腕拭きて居へ、御免あそ



ばせ御無沙汰をと入ッて来たの乳母のお龍、見るより主人のハタと膝うち。オ、お龍が大分玄ばらく来あかつたな、ハイ、お蔭で皆奇壯健で、時に宜い處へ来て呉た、さつそくだがお前に少し頼みたい事がある、といふの外、の譯でもないが娘のお延が斯々いふ事情だと、委細を話せばお龍のみこみ。夫の造作もない事で御さい升、これから直にお嬢さんのお部屋へ参ッて屹度承はつて参りますと、お龍の夫よりお延が寐るる部屋へ行きて枕元に座り。お嬢さん、眞に御無沙汰を致しました、然してお病ひ事を一向存じませんでお見舞にも参りませんでしたが大分お疲れおさいましたヨ、貴嬢が斯してお寐て在ッしやるもんですから御両親の何様に御心配をして在ッしやいませう、就ての妾から貴嬢へ少し伺ひませし度事が御さいますがお隠しおすつて行ませんよ、貴嬢の何でございませう、斯と心に思ひ詰めてお居での方が御座ませう、イ、エ、お隠し遊ばすナ、此の妾のナヤンと洞見て居り升ヨ、一体そのお慕ひおさる方といふの何方のお方で御座い升

か、サアお聞せおさいまし、何もさうお隠しなさるに及びません、ア、大久保さんで御さいますか、チャと仰やれといふに、貴嬢の様に其様して隠して計りお居でなされると實に仕様が御座いませんよ、夫よりの是々した人に斯だからとお言にされ、妾が中へ入ッて御両親へ程よく申し上ませうに、早く仰やれと言ふたら早く、といふにお延の耻かし相に。夫での妾が心の裡で慕つてゐるお方を言ふほどに笑つての否だよ、妾が此様お思ひ病ひをするまでに慕つたお方といふ此の裨史の中に書てあるお人ぢやと言つ、出すの秋の七種、お龍の見るより喫驚して。お嬢様、貴嬢マア是の物の本で御さいませんの、物の本に書てあるお人とい。サイナア、妾の其の裨史の中に書てある久松とやら云ふ男に、と後いひさして袖屏風、お龍のいよ、く打驚き。焦るゝお人どあれ、御両親へ其様申して見ますれど此の久松に何か染といふ情緒があつて假令あたが何様にお慕ひなさらうとも叶はぬ懸かと思はれます、併し夫はさまでに御執心から成らぬ迄も力の盡して



見ませうから苦容く思はぬ様よあされと言なぐさめて其場を立ち此方へ來りて云々ありと告るに両親も驚きしかど何をいふても可愛い娘鬼もかく大坂へ人を遣て久松に縁談を言込み見むと日頃出入する骨董屋にて小氣の利たる松藏といふに、委細を語りて彼地へ下しぬ、然れば松藏の便船に搭みて大坂へ行き、今昔も瓦屋町聞て鬼門の角屋敷ある、油屋方へ至り、諸久松さんに逢たしと頼み込しに居合す者等不審顔。此店に久松といふ者の居ませんが全体、何方からか出あさつた若しや倉松の間違で有ませぬか、コレ倉松や一寸とお出呼れて出て来る一人の小僧、色が黒く目ばかしパチンリ、此様な奴から大坂へ來すとも淺草の奥山へ行けば見らると思へば碌に顔さへも見ず。して見ると久松さんといふの、モ一當家に居られませんか夫の眞に残念あり、然して行れた先の分りませぬか、實に其の久松さんとやらを養子に仕たさに、漁船の便利がある世とい言へ東京三界から斯して來たので、今さら逢すに歸る様で、下り甲斐あき事です

から何か其の久松どのに逢る様にお取あしを願ひますると、頼めば居合す店の者等が。それの眞に氣の毒だが久松といへば古い人、中々當今まで生て居るまい夫も野崎村へ行て那の演劇でする久作どの、家を捜せば荒神棚の布袋同様すゝびて生て居るかも知れぬといふに松藏のうらうあづき。私もさうと思つて居たが此方で知れぬ仕方があひ野崎村まで行くど仕ませう、是の眞に飛たお邪魔と挨拶なして此家を立出で野崎村へと心ざしたり、

野崎村といへば大坂より三四里許り隔りし小村、腕車で行けば一走り松藏の油屋を立出ると直に腕車を雇ひ、ガク／＼と急がすやどに二時足らずで野崎村へ着き、久作どの、宅の何方と村の甲所乙地捜し歩けど、いづれも知らぬと訓りにて中々知れる様もなし、松藏も此上のとて村の戸長役場へ行き、久作といふ人の宅の何方ありやと尋ぬるに掛りの者の、久作と訓りで分らぬが、苗字の一体何といふかと問れて、松藏も當惑あし。サア苗字が



分つて居る位なら今までに大体分つて居ませうなれど、苗字も知れぬ番地も分らず、夫ゆゑ實に困つて居り、何か久作といふ名を當に捜して見て下さうませぬかと頼むに。夫の迷惑千萬併し和郎も困らうから兎も角捜して上やうと、戸籍帳を調べて呉ても久作といふ名前無し、今の松藏も詮方盡て當村を立出で、一先づ大坂へ歸り來りしうへ翌日同地を出立して東京へ戻りぬ、夫との知らず、主人夫婦の今にも宜い返事を土産として歸る事であらうと首を延して松藏の顔を見るより。イヤ御苦勞く、然して先方の返事の何ぢや、久松がッンと言て呉たか、ナハほどよく行ぬと、夫での親の久作が故障立ち、ろれなら別に案するよ及ばぬ、肝腎の本人さへ承知をして居れば到底出来る話ぢやと先ぐりして云ふ主人の呑こみ、松藏の言ふ機を失つてモヂくしてゐるを女房のお常が見て取り。良夫の様にさう仰やつて、松藏が何もしない事が出来ません、然して松藏返事の何いふ容子であつた、チャツと聞して、呉と膝摺寄るに松藏の落力して。實に斯いふ

次第で御坐い、升先づ瓦町の油屋へ參つて久松どののいと聞て見ると、其様者居る、居るいどの事、夫での若しや野崎村の實家へ歸つて居り、いせぬかと直に其の足で野崎村へ行き、戸長役場へまで頼んで貰ひまして、久作どの、家の分らぬ詮事をしに、ホッヤリと斯して歸つて參りましたと語るに、失婦の力を落し、それの困つた事にあつた、どうしたらア宜からうと子ゆゑに迷ふ、兩親の心の程を察しやられぬ、登下松藏の何事か思ひ出せし容子にて、小膝を進め、時に一寸と考へ出した事が御坐ますから申し上ます、其の秋の七種といふ稗史のたし、曲亭馬琴といふ那の名高い先生が著述された本の様に思ひます、馬琴先生の作で、御坐いませんかと云ふに、母親の笑貌して。あるや、秋の七種の作者の馬琴先生だが、其の方へ問合して見やうと云ふのか。奈何にも左様いたしたら、白モ知れぬ事の有るまいと思ひます、ゆゑ、是から直に馬琴先生の家を尋ねに參つて、奈何で御座いませう。夫の前云ふ通り、馬琴先生にさへ聞けば分る筈、何も大儀



だが足のいでに馬琴先生の所まで行って来てお呉でないか。行って来て呉れど仰やる迄もさい事一度かうして中へ入りましたからに飽まで歩いて是非久松どの、所在を探し出さいで成ませぬと云ふに夫婦の力を得て。お前も嘸ぞ迷惑で有うが娘の身上も係る事ゆゑ何の一寸骨を折て見てお呉れど、腕車賃もど與ふるに此様事を仕て戴いての辨ませぬ、と言ふやどおら返せば宜きに、先づ貰ひし金を懐中へ入れ橋場を後に立出て浅草より馬車に乗込み、馬琴の家の中坂と聞くま、取敢ず萬世橋へ出で此所より又赤馬車に乗換て中坂へ至り、借て馬琴氏の宅の何方にやと探し歩けどトンと知れず、酒屋や魚屋の出入先の廣いものゆゑ聞いて見れば分らうと、或る酒屋へ入つて聞いて見ると、居合す小僧が知つた振に。ちよく亭から直に向ふの横町ですと教へて呉たに、雀躍して其所へ遣て行て見れど、曲亭と記した家のかし、ハテ是れ變だど又た前家へ歸つて聞て見ると、料理店だとの事に、幾程何でも著者が料理店にあるとの不思議、併し始が雀になる

と云ふ事もあれ、先づ行て見やうと、再び辻を曲ると成ほど一軒の小料理店があるから、御免ささいと入ると腰掛が並んでゐて職人体の男が二三人一盃遣て居る体裁の陳雑にして作者の家との見えず、松蔵のいよく不審と其所をキロく、下女の大声を出して。入ッしやい何に致しませうと云ふに松蔵の体裁わるく。イヤ私の少し先生に用事があつて来た者だが先生、御在宅ですかナ。ハア左様で御坐いましたら旦那の何で御坐い升今朝から近處に將基の會があつて行てお居で、すが御用があるから呼で参りませうかと云ふに。夫での恐れ入ますがお手間の決して取せませぬからナヨツとお迎へを願ひます。ハイ夫での直に呼で参りませうと下女が出行く間もあらせず歸つて来たの五十許りの頑丈親爺。これの能く入ッしやいませした何か御用事がお在さる相ですが何いふ事で御坐いますと聞くに松蔵の膝進ませ。イヤ外の事でも御坐いませぬが貴君が作述をすつたアノ秋の七種に記した久松どの、事で参りましたが久松どのの只



今何方に何して居られまするか尋ねるに主人のケツ顔。何の事かと  
 思つたら是の飛た事のお尋ね夫のお聞きあさる先が違つて居りませう久  
 松の事丁度三十年程以前岩井紫若が中村座で仕たのを見た計り那の時  
 の演劇の實に見物でした貴郎久松が久作の足へ灸を點かから門外へ来て  
 居るお染に氣を取れる所の体裁杯の迎も今時の俳優で出来ませぬよと  
 飛でもかい話し振に松藏の合點ゆかずどういふ事の間違かと聞き合すと  
 此家の名が一直亭といふより曲亭と直亭との間違と知れ肝腎の馬琴の家  
 の矢ッぱり知れないで茫然歸つて来たから主人夫婦も今の外に詮方なく  
 一いへ娘に其の事を聞せたから猶さら病氣の重る事ゆゑ何と仕様の  
 なさむのかと當惑さしるる所へ遣て来たの親類の太郎兵衛主人夫婦より  
 右の事を聞て事もあげに。夫の決して困る事ありません、アノ死口を寄  
 たり生口を寄たりする巫女を招いて馬琴さんの死口を寄ていどうでせう、  
 いくら捜すとも當時馬琴さんが生て居る筈のあいからとの勘めに成ほど

夫の至極の妙策而て其の巫女とやら何方に居ませうと夫婦の尋ねに太  
 郎兵衛。然れば谷中邊でも捜したら分らぬ事の有ますまい幸ひ私に今  
 日歸りがけに谷中に用事が有ますから聞合して見ませうと言葉を誓ひて  
 歸りしが其の翌日丁度宜い巫女が有たから明日一所に進行くとの端書が  
 太郎兵衛の許より届きしゆゑ主人夫婦も大に喜び明日の朝よりそれ  
 ぞれ準備をして待ぬる程もあく巫女を伴ひて太郎兵衛が入来りしかバ設  
 けの座敷へ通せしうへ主人が逢ふて云々ありと容子を告れば巫女の委細  
 呑込みつゝ頼て例の箱を出し弦を執り左もあはれ氣に伊勢よの天照太神  
 宮奈良に春日大明神八幡に八幡大菩薩と諸神々を呼出し終り夫より一  
 段聲をはり上げ

寄さぞよく我子を思ふ兩親の心を便なく思ふより十萬  
 億士の長程を鞆もなさで來つるぞりヤヨく喃お延と



の今予が陳る處を能く心して聞分ね却説那の秋の七種と  
稱る稗史のお染久松儕が身は事を假て勸懲の意を祖せし  
迄よて眞の然る事の在し非ず夫を讀ひがみたる和女の  
戀情益かき絆し心を傷め疾病を重らす淺猿さよ止ねく

と云ふかと思へば巫女の素身に返りける斯と聞くより娘のね延の喚と計  
りに泣臥しつゝ姑しの物も得いはざりしが良あつて頭を擡げ。假令繪虚  
事になせ一度斯と思ひを懸たる久松さんと添ぬ襟あら生て居るとも樂み  
なし只此上の尼にあつてと有合したる剃刀を執るより早く根元に當て  
黒髪ふつと断たるに是いと驚き両親が言葉を盡して諭せども中々用ふ  
る様もあく去として一人娘の事なれば尼となして外へ出させねば詮事なし  
に我家の空地へ庵をまつらへ此へね延を住はせる事とあしぬ然ればか延  
の自から妙變と名乗我が庵の中へ久松の像を造作へ朝夕の回向怠りなく

體經の中に日を送り居しとぞ

その實の影も形も亡人の

位牌に操たてる線香





江戸の敵を長崎で  
打つ幫間の義俠氣

所だけいすと云ふ名も似通ひたる小梅の里にうぬ惚強き面相の田舎下りの業平橋近寄りに住家の小さくも膽ッ玉の大きい名札に、浪速堂梅里と記して門頭に掛け、寸陰是れ千金といふ高い浮世を一分五厘に直切たふして他人の稼ぐを水に明礬無理から濟して居る男ありける、或日の事芝の俳朋の許より出来るか出来ぬか一番ためして見る運座の催しをするからとの手紙に拙者が行す座が持まいとグツと延した花いかだを竊に顔へあすり附け否身だらく、裾長き衣服を着流して家を出かけ京橋まで来る折から向ふより来る職人体の男の散髪床でも初めるにや大きやかなる姿鏡を擔ぎゐるより梅里のすれ違ひさま其の男が擔ぎゐる鏡へ我が顔を寫して見ると之の奈何せし事あるか自惚切たる自分の顔の人間らしく寫らずて、犬か狸かさるといへく、憎くさ此奴の所爲かあ、我に何うらみ有つて斯の

爲しつるものか去來引捕へて糺しくれむとの思ひしもの、先の強さう奇職人体此方にやけた男のこと腕力で行けば負ることが知れて居るエー口惜と切齒仕ながら行過たかれと奈何にも此の口惜さが胸に込上て来て芝へ行く勢ひも無き折かく此所まで来た道を取返して家へ戻り氣晴しに獨酌で一盃ひっかけたが夫でも未だ氣が晴ぬより蒲團を出して轉がりしが病痾の端緒翌日から臥し續け次第く、に重くある計り、中々急に頭が上り相にのさきより雇ひ婆さんのねチャラと云ふが給金離れての大心配。モ、旦那さま貴郎の様に飲ず喰すに其様して寝てお居でにあると反て勢が落ちて宜しく御さいませんからナ、無理をして物を喰りなさいまし、是が喰べ度といふ物があるから買て参りませう、先刻八百屋さんが参りましたらら鶏卵を取て置きました、が、那を入れてお粥でも煮て何でございませと云ふに、梅里の寢返りつゝ、苦しさら赤聲で、イヤ、何喰たくい、夫より外に少し頼みたい事があるが一寸一走り行て来て呉れぬかと



いふにふチャラの眉をまげめ。其参る先の遠方で、も御坐い升か、遠方だからとて参られぬと申すので、御坐いませんが若し遠方であると出て行た後の貴郎が一人ゆゑ一寸とお湯をお飲さるので御勝手が悪く御ざいますから、近い所で有ますならと云ふに梅里のうちうあづき。何から何まで能く氣を附て呉れる和女が其様して信切に云ふて呉るゆゑ若しや今死るとも心を遣す事がない、然して其の用事といふの外、事でもないが、何か吉原へ行って都貧中といふ期間に會ひ私が急に話の仕度ことが有るか、ら来て吳と頼んで来て貰ひたい、もつとも貧中の宅、此ころ外へ移轉たつやらで其の番地の此所での分らぬが貧中とさへ言て聞けば期間の事ゆゑ直に知れやうから大儀だが何か行て来てお呉れと頼むにかチャラの承知して夫で、直に此から行て参りませうと、年齢の取ても雇はれ廻るやと有て中々元氣も吉原として出て行たる其後へ訪ひ来し友人の腐角。イヤ梅里子容躰の奈何ですナ相かはらずか、時に君の病性の事に付き少し

聞込だ事が有てお見舞かた、参ッいたのだが、マア餘まり馬鹿らしい事だから其様を事の有まいと思ふが併し耳に入つた事だから兎も角君に聞て見るのだが、世人の浮評で、君が此度の病氣といふの、何でも道で出會た職人体の男が持てゐた鏡へ自分の顔が凸凹に寫つたからの原因の様に聞いたが實際さういふ事があるかとの尋ねに梅里の思はず起直つて。如何にも夫の實地の話で、何の怨恨があつて其の職人体の奴が我が顔を其様に見せたのか分らぬから直に引捕へて一談判して見やうと思ふたが先、何をいふても職人体の荒くれ男腕力で事を初めれば、屹度敗やうと思ふから口惜さがらも歸つて来たが疾病の發端といふさへ左も口惜さうなれば腐角の可笑さに得堪ずてや、ツとふさ出し掛た口頭を押へて。あるやと一寸と聞て見ると道理の様だが能く考へて見ると詰らない事の様には思はれる、先づ第一何方の者とも譯の分らぬものに怨恨を受やう筈があし又た縦令うらみが有にした所が其様を事として怨恨を復ささいでもマッ



と外に仕様のある事ゆゑ夫の畢竟ひがみ魂性といふもの今一步進んで云ふて見やうなら怨恨があつて持つてゐる姿鏡へ君の顔を寫した所がそれ迄の事でのかいゝ是が顔を醜く寫されたから壽命が縮少といふでのなし、斯いへば失敬だが全体そんな事を苦にして病氣に罹るおどとい風流人に有まじき次第奇且にも俳道を通るものが職人おどの爲に病氣附された杯といふての世間へ聞えがしも悪いから氣を取直して一日も早く快くある様にあらんで行ぬぢやア有りませんかと言葉を盡して諭せども梅里の夫を服ふる様もあき計りか反て大きに立腹おし。コレマア待給へ腐角子、君のどうも變奇事を言るゝナ、ハ、ア分つた是やア何だナ君の彼の職人体の奴と近しいのだナ、それで無くの彼奴に頼まれて容子を見に来られたのぢやナ、アおいと仕て見れば何も彼奴の肩を持って其様けなし附なくつても宜でのかいか拙者の事を悪く言て向ふのひいさをされるからにの屹度何事か頼まれて來られたのに相違がない、俗にいふ君の問謀ぢや、イヤサ問者

だ爾ういふ卑劣お人との知らず今日が今日まで交際して居たの拙者の過失今日かぎり交際の絶たから其様思つて下され、エ、馬鹿らしいと彼方へ寢返り、物さへ言ぬ意外の状況腐角もマツときしたるにや。これの怪しかる事、四百四病といふ病痾の中に君が罹られた其様いふ病のヨモ入つて居ますまい、入つて居ぬとして見れば四百四病の中にもない妙な病をわづらふ様お馬鹿げた事のないから意見をしても用ひぬとい儲々たはけた沙汰の限り、さういふお人から此方から絶交だ交際をしての外聞が悪く、今にも君が亡おつたおら恐いお顔の閻魔おのも、顔を外して笑ふの保証、粹お所と相場の極つた小梅の里にも君の様おる呆然た人が居るかと思ふと澆季にあつたのが知れると滅す口を叩きながらに腐角の起て歸へりゆきたり、然れば梅里の口惜さの上張をして無念く、と叫べども病身おれば腐角と争ふ事もおらず見すく、歸し遣りたる所へ、ね、ヤラと共に來りし貧中が夫と見るより不思議顔。貴郎のマア何おすつたのです、誰かお參つて



喧嘩でもあすつたのですか、ナニ只たいま其の相手が歸ッて行たぞチエー  
 残念ナ今一足はやくバ、ム、と見返して門外へ出かけるよりおチヤラの慌  
 て、押し止め。コレ貧中さん血相替て何方へと、言せも果す貧中の。ハラ知  
 れた事遠くの行まい跡追駈けてと菊五郎の似聲で云ふ可笑さに梅里も思  
 はすウラ、ハ、と苦し笑ひ。コレく貧中、もう止て呉く己の腹がよ  
 れて切あくる哩、いつもお前の顔さへ見ると餘り腹をよぢらせて後でど  
 ッかり病氣にこたへるマアそんな洒落の止て今日己が呼に遣た用事を早  
 く聞て呉よと云ふに貧中の漸く尻を落着け。是の何様も失敬、そして其後  
 の御容躰の相かはらずどの困り升ナ、實の三日許り前からお伺ひに参らう  
 参らうと存じながら轉宅た矢先でバツく致して居りましたからツイお  
 見舞にも参りませんでしたがお迎へをうけて恐れ入りました、處で其の  
 御用事といふの何云ふ御用事ですか、永らく御愛顧にあつた貴郎の事ゆ  
 る何様お事でも致しませう、全体御用の何様事でも貧中が慰め顔で尋ねる

下より梅里の太息を吐て。サア其用事といふの外の事でも無が私の病  
 氣の此間話した通の事情だから今にも若し目を閉たら私の爲に、其の相手  
 の男を捜し出して敵を撃てお呉れ是れ計かしかお頼みぢやと病細りたる  
 両手を合し頼むに、貧中の打合點き。何の事かと思ひましたら其の敵討の  
 事で御坐升か、モ一再びと仰やるな私が萬事呑込で居ります、願はぬ事での  
 御坐い升が今にも貴郎がお亡かりあすつたら私が貴郎の替りに草中と分  
 ても當人を探し出しソツ首引ぬいて貴郎へ御覽に入ます、併しそれの貴郎  
 のお身に萬一の事の有た上の話して願はくは何様か一時も早く快くあッ  
 て御自分で其敵をね撃かざる様であくは良けません、と云ふに梅里の頭を  
 うち振り。イヤく此度の病氣の迎も快くあらうとの思はぬから必ず其  
 の言葉を忘れぬ様にして今にも私が目を閉たら屹度敵を討てお呉れ、然し  
 て此の少しだがと言つ、蒲團の下より百圓の紙幣を出し、何か敵を探す路  
 費にして呉る様よと渡せば貧中の押戻して。どうして、如此な物を戴



いての濟ません私がかういふ身になつたといふのも原を糺せば皆貴郎  
 のお蔭畢竟私が敵討に出やうと云ふのも其の受た御恩を報じるため夫に  
 此様な金を収めての濟せぬ名からして貧中とい言へど路費位の事の何に  
 も成りまするは是のお手元へお返し申しませると戻せど梅里の承知せず。  
 イヤくさういふ事を言て呉ると實に困るホンの少し許りだのら之の是  
 非とも納めて置く様に強ていふに貧中も是非なく金を懐中にし  
 て猶や後くの事を話し又た近日と挨拶して己が家路に就たりける斯て  
 梅里の三日ばかり経て還言ひなしからず現世のお暇ををしぬ夫と聞より  
 貧中の飛で来て野送の事を初め萬端さし圖して所置を附け借自分の日  
 選んで出立する事としたるが就ての今日まで愛願にあつた旦那先へ暇乞  
 をせずのあらじと先づ一番に本郷弓町に居らるゝ或る御隠居の所へ出  
 かけたるが此の御隠居の太分戎三郎で話を爲すにも餘ほど聲を高くさ  
 いと聞えぬといふ難物では是が裏店の爺さんでゝも有たから誰も聲を掛る

人さへ無いだらうに金持の隠居といふ女で妙なものトッ掛ヒツかけ遊び  
 に来るものがあつて何日も碁が初まつて居るか茶の湯が初まつて居ます  
 が茶の湯の方から結構とか何とか言て手取ばやく遣て除られますれど碁  
 を圖て居る時に出合したら大變まづ一番の碁が如何しても半日掛るゆゑ  
 用事が有て来た者の長い間待されるので大困り客間にお客の欠伸で充満  
 にあつて居て遅れて来た客さぞの先客の欠伸と接頭をずる位あり丁度  
 貧中の来た日も隠居どのの碁の最中でお負よ自分の方がサト敗色といふ  
 ので側へ煙硝氣の物を持って行くど危険な様にあつてゐる所ゆゑ貧中も行  
 た事へ往たが話しをする事さへ出来ずボンヤリしてると程よく隠居どの  
 が勝を占たので其機を外さず貧中の進み出で。時よ御隠居様私が今日参  
 ったの外の事でも御坐いませんが急に遠方へ旅立つ様に成ましたので  
 其お暇乞に参つたので御坐い升どうも永らく御愛顧にありまして有がた  
 う存じますこれほど迄御愛顧にして戴いた貴郎様さどにお別れまをして



遠方へ参り度御坐いませんが眞に據どころ無い次第で、ヘイ義理で持た  
 浮世の實に辛いもので御さいますトいふに隠居の不思議さうに。ム、何  
 の、夫でい遠方へ行ねばならぬ事が出来て暇乞に來たといふのか、そして一  
 体マアそれの如何事なんだ、聞して見るが宜い話に依つてい遠方へ往すと  
 濟む様にあるのも知れぬいからと言へば、貧中の頭をうち振り。ところが  
 何しても其様事情にゆるぬいので、夫に種々とお話しの仕度事が御坐い  
 升が少し他の方へ憚る事も御さいますから恐れ入りますが御隠居暫時別間  
 へと頼むの定めし深い事情のある次第あらんと隠居どのの貧中を伴ひて  
 離れ座敷へ入り。サア貧中此所ならば宜ろしからふから話すが宜い、ド、  
 どういふ事なんだと尋ねられて貧中の。實の斯いふ事情なので、マア聞  
 なすつて下さい、私が愛願にある旦那に梅里さんといふものが御さいますし  
 て其方の餘やど自惚の強い方で、魯西亞亞米利加英吉利と西洋各國まで搜  
 せば知らぬいと我が日本の内地でい己ほど意氣な好男子のあるまいと思

つて居られました所が先月の事、その梅里さんといふ方が芝の朋友の所  
 ら招かれて参られる途中で職人体の者が姿鏡を持って通るのと肩摩さま、何  
 心なく鏡へ寫つた自分の顔を見られると凸凹に寫つてゐたものですから  
 是の己は何か怨恨のある奴に相違がぬいから引とらへて目に物見せて遣  
 らうとの思はれたもの、其の職人体の男の奈何にも強さうですから腕力  
 で遣る事もあらず口惜ながら歸られたのが疾病の原因にて此間とうと  
 う亡かられましたが丁度亡かられる二三日以前私を迎へに來して言はれ  
 ますよ、若し今にも己が死んだから己の無念を晴す様にどうか復讐をして  
 呉ど、路費まで渡しての頼み、私も永年愛願になつた旦那の事ですから、宜し  
 う御さいます若し貴郎がか亡かひますつた様な事から屹度復讐をいたし  
 御無念の晴る様に致しませうと言ひましたので一兩日の中に當地を  
 出立いたす積りで御座い升と、左も殊勝氣に陳述したるゝ隠居の聞て大  
 きに驚き。夫のマア飛だ事だ、まかし復讐といへば腕が利て居ねばならぬが、



萬一首尾よく敵に巡り合はれた時分は如何して敵を討つ積りあんだ聞てさへ便ちの事でないか、何の兎も角受た恩を忘れず其様して敵を討に出る事ど、の實に感心な事ぶと褒立られて貧中の。何も私だつて貴郎好んで復讐などの仕たくの御坐いませんが義理ほど辛いもの御さいませんよ又素より私の撃劔を習った事がない替りに柔術を知らず、逆も腕力で遣ての向ふの奴に叶ひますまいから若し首尾よく巡り遇た時に例の滑稽で向ふの奴を笑ひ殺させる積りです、夫も適はずして敵に殺される様事にあつたら何か一本の線香でも立て下さい升様にお願ひまをし升と頼むに隠居の泪を浮べ。コレくろんお哀れッばい事をいふものでない、私もお前が首尾よく敵を撃て無事に歸つて来る様に拜むであげるからと言さめつゝ頓て起て手算筒より三十圓の金を取出し來り、サア是は少しだが路費の補にするが宜い、然して出立を祝ふため一盃やらう、家も居ると彼所に待てゐる連中に一本用談を仕かくつてのあらぬから幸ひ是から何方

へ出かけ様と客への遠方へ出立をする者があるから種々話しがあつて、今日諸君へお目に掛つて居る事が出来ませんから失敬ですが御一同明日でもお出下さります様にと來客を歸して下谷の鳥八へ車を飛せ同様に別れの酒宴をさし出立を祝ひやりしに貧中の大きに喜び隠居どのに無事でお暮しなさい升やうにと挨拶あして双方へ分袂れ此日の外方へ立寄ずして其儘吉原へ歸りしが是より二三日の中の日那先を歩き廻りたるうへ先づ京都へと志し東京を後に立出あしたるが途中敵に似寄の者もやと心遣ひながら下れど何分仇敵の職人体の男と計りで悉しき事の分らねハ貧中も實に困り入て頓て西京へ着たる上も足に任せて其所此所を捜し歩けどトント知れず此上の大坂へ下り夫より四國九州支那印度國といふ國の何方から何方までも捜して先づ大坂へ下り日々市中を歩き廻れど此所にも聞きたる如き人相の者に出會はず斯ての愈々西國九州と歩き廻らね成まいと思ひゐたるに我が泊りゐる旅宿の下女が脊中へ紙の紋を



貼れたるを朋輩が仕たとも知らず是の的中アノお客さんが仕てやつたのやト怒りながら隣座敷のお客の油断を見透し自分がされた様を紋を貼た  
 とで其の客の飛だ迷惑を爲しこれこそ本當に江戸の敵を長崎で撃たのだ  
 の言居たるを此方にて貧中が聞取り思はずハハと手を拍て。江戸の敵を  
 長崎で撃つといふ事の以前から能く世人のいふ語だつたが夫を今までト  
 と忘れて居たの大失策敵の何でも長崎で撃つものに極つてゐる様だから明  
 日にでも大坂を立て長崎へ行くと仕やうと直に翌日大坂を立て長崎へ行  
 き其所よ此所よと捜し歩かうちト丸山下にて出會し職人体の男の嚮に  
 梅里が言し如く一面の鏡を持居るより借の此奴が敵あらんと直に飛か  
 ヲツて胸元を執へ。ヤア、汝の我が恩人梅里子の敵にて有ん拙者事の東  
 京吉原の幫間都貧中といへるもの梅里子のために汝を捜す事久しかりし  
 に天運空しからず今日此所にて巡り遇しこそ幸ひイザ尋常に名乗合て勝  
 負を決せよと名乗掛たるに件の男のツツ、と噴飯しながら。コレ

コレお前のマア何をいふのだ氣でも違つて居るのだらう、ナ、氣の違つて  
 居かいと見ると人違ひだ梅里とか梅枝とかいふの、東京の落語家の  
 名に聞た計りで逢た事も見た事もない男だ、その見た事もかい男の敵あど  
 との思ひも寄ねへ事だ外を捜して見るが宜い馬鹿く、しいと言つ、胸元  
 を執へし貧中の手を振拂へば貧中のヤツキとあつて。ヤア覺はないと  
 卑怯であいか現在我身の爲に恩ある梅里子を手につけ、イヤサ鏡に掛て殺  
 して置きながら今さら知らぬ等どの、モ、斯ある上は是非に及ばず覺悟を  
 あせと言より早く藏し持たる短刀引ぬき切て掛るに職人の喫驚。此ノ蓄  
 生黙つて居れば宜氣になり滅法お事を仕やアがるかト直に貧中の右手と  
 つて捻伏せあたら拳を上て打するに貧中の悲しき聲を振絞り。ヤアゆ  
 るしてくれ、是れいゝ、事情のある事だ、さう打れると一命がある、  
 ゆるせ、くとうち頼むに職人体の男も少しく手を緩めて手前の様を馬鹿  
 お奴に言て聞せても仕方がねへが、髮結こそ仕て居れ此の善さん、出一匹



でも殺すのが嫌ひだ、況てや人間を殺すか、ンてエ事ハ夢にも見た事が無へ  
それに敵あど、ハ果然もの奴、と言ふに貧中も全く人進ひある事を知り、い  
ろいろ詫たる上、實ハ斯々云々にてと事有休に陳たるゆる其の職人も馬鹿  
ハ馬鹿だが恩を無にせぬハ、罰間に似合ぬ男と褒たるうへ豫讓の轍を履め  
よとて持居し鏡を與へしゆる貧中の夫を毀して形ばかりの仇討を爲した  
りぞぞ

人間の五常の道を守りつゝ、

豫讓の轍を履し仇うち



頭上は宿る女房を賣て  
金子を辨ぎる正直律義

正直の頭に宿る神田松枝町に徳永八兵衛といへるものあり性質ての正直  
者かれハ誰とて本苗を呼ぶ者なく只だ正直の八兵衛く、と綽號を附け  
たるが或る冬の事ありし八兵衛ハ稼ぎの腕車を挽仕舞て寒酒に寒さを凌  
ぎ女房のね春と俱に枕を並べて一眠りするやせぬハ門の雨戸をトン  
トンとうち叩くもの、有より八兵衛ハ目を覺し。エ、今時分に來たのハ  
誰ぞ何方のものだと尋ねて見るに來りし者の聲でハ確に熊三といふ近所  
の仲間らしきより。打くかア熊ぢやアか此の夜ふけ深更にマア何し  
に來たのハ用事があるなら明日にして呉る、モ一寐ツちまつて寒くツて起  
られぬいからと言へど中々承知をせず。明日で宜い様ハ用事から己だッ  
て斯う夜ふけに來やア仕ねエ是非本夜でかく成ぬい用事があるんだか  
ら雨戸を開て呉んか、何にしても立て居ちやア寒いから、エ、ハハつばふ寒い



夜だとガタ／＼標へあがら猶戸をト／＼と毀るばかりに打くより今  
 の八兵衛もち捨て置き兼ねて戸を開るに熊三の内へ入りつゝ小聲にあつ  
 て今夜かうして已が来たのの實に甘い儲け口があつて来たのが如何だ一  
 口乗ねへかと言ふに八兵衛の眉を皺め。儲け口から一口乗と言ふても  
 此方から頼んでゝも乗て貰ひ度が、シテろの儲け口といふの如何いふ一件  
 かと、聞くに熊三の口ツヨリ笑ひ。其の儲け口といふのナト此所で話し悪  
 いからチヨイと門外まで出て呉さいか、チヨウれで明日ゆつくり聞うと、  
 サアそれぢやアいけねエ、マアちよいとの間で宜んだら門外へ出て呉ね  
 エ、どうしても本夜迄あきアあらねエ儲け口だ、明日にありやア出来るか出来  
 ないか知れねへ儲け口だからと嫌る八兵衛を無理に戸外へ引出したるうへ  
 後のペリを爲せ直に向ふまで一所に来て呉さい何分戸外ぢやア話が出来あ  
 いからと云ふに八兵衛も詮方なく熊三の跟について行くうち何時しか上  
 野の公園まで来りしゆる。オイ／＼熊、お前の何方まで已を連れて行のだ此

所のモ、上野の公園ぢやアさいか、實のチヨイと戸外までだといふので女  
 房にも言さいで出て来たんだから早く歸らなきやアあらさいからとあせ  
 れバ熊三のせ、ラ笑ひ。さにも其様急かあくつても宜ぢやさいか夜行に  
 日がくれる氣遣ひのさいから、どうで仕事は是から先だ、マア此邊で一吸や  
 らうと道の脇の石へ腰を掛けて煙草をスバ／＼吸かけたるより八兵衛のい  
 よ／＼心が心からぞ。私が急ぐほどお前のなや悠々する様だが早く其の  
 儲け口を聞いて呉るが宜い、あるほど夜道に日が暮る氣遣ひのさいけれど其  
 の替り夜が明るるといふ心配がある又た何様か儲け口の知らさいが斯う夜  
 が深更でい出来さいから明日聞くと仕やうでさいか其様あれば眞實に此  
 方も上都合だからと言へど熊三の聞ぬものゝ如く空の星影を眺めつゝ  
 大分夜が深更た様だがモ、仕事を初めても宜い時分だからソ／＼仕事  
 を初めに掛らふかと獨語つゝ八兵衛に對ひ。サア八兵衛さん仕事に出掛  
 やう時刻が好くなつたからと言ふは八兵衛の不審顔。仕事に掛らうから



て何いふ儲け口だと言ふ事も言ひいで困るでないか何位儲けがあるからとて後日の迷惑にある様を事柄から御免だ、兎も角その儲け口を聞かせて欲しい其様でかい中の手を出す事が出来まいからと、承知をせぬ熊三の困りて。ぢやア仕方がない話して聞さうが實に己が泥棒に入る片相手に成つてはしいのだ。ナニ泥ぼう、アノ盗人にと驚く八兵衛を見やりて熊三のせ、ヲ笑ひ。コレ、かにも其様かどろく事ア無い、このセナ辛世の中に資本いらすで出来る業体てエの泥棒より外にありやア仕ねエまッばふよして暮したつて冥途から迎へが来た時よやア否だと頭をぶる際にもゆくめ、して見りやア何時知れねエ頼寄ねエ生命だ、ヨシ人並に生存るとしても五十年が通り相場、その五十年を細く長く送らうより太く短く陽氣にかくつた方が宜いだらう其所をグツと歸つた此の熊三さまの是までから内々で手を長くして小さき仕事をしてぬたが夫での中々愉快の代に足ねへから今日を手初めに甘い儲けを爲る積りだと云ふに入兵衛

いよいよ、暇。いくら金がほしいからとて泥棒をするさど、見さげ果た男だ、さういふ腐つた性根と知らず、今日まで交際して居たの己の失策この入兵衛の自分の足の肉を割て喰ふとも他人の物に手をつける様を事の仕ない、泥棒をせ、聞くも汚らはしいと言放つて歸へらうとするをドツコイさうのと熊三が捕へて。それぢやア泥棒を仕ないといふのか、爲さけりやア仕あいで宜い、その替り己が捕へられた時、ハ私との相棒の入兵衛といふ男で夫の今から、した所をり升と言へばお前の直に捕縛にまつて己と同罪、して見りやアお前の身といふもナニ泥棒を仕たつても仕あくつても同なじ事だ、嫌がるものを無理に引をつて行て割合をやるより己が一人で仕事をして、もしハツサリ遣られた時、今云つた通りお前を暗い所エ入てモツサウ飯を喰させ、己の話相手にあつて貰はふから、歸りたかア勝手に歸るが宜いと怒りたつに入兵衛のまたびつくり。なるほど假令泥ぼうの仕あくつても熊三奴が捕へられた時に己が連類だと言へば直ぐに



引とらへられて佃嶋行きだ、して見れば魅込れたのが運の盡とあきらめ一所に附いて行くと漸う決心して是より熊三に承知の旨を告ると熊三の大さに喜び。お前が承知をしてくれたので己の大層力づいた、それでいはい直に出かけやう、然して己が本質入る宅の根岸で丁度谷中より下て来る所だが其家の主人を今日第一銀行の前から乗けて行たが何でも第一銀行へ金が預てあつて夫を取出しに來た様ぶつたから、それといふし又聞て見ると矢ッぱり己が想像通り五百圓といふ金を取出來たので其の五百圓の金の明日何方へ拂ひ渡す容子だつたが今宵の未だ宅に仕まつて有る筈だから彼をせしめる積りだ、然して盜賊の上得意と思ふの、家内が少人数で爾も若者あしの老人ぞろひ、かういふ宅へ入らさきやア泥棒に入る宅のねエせ何でも初めの中に若い者が居たり腕の利さうな奴が居たり爲る家エハ入れねエ奴サ、オヤボツリと遣て來たナ、併し雨の泥棒の景物の様だから入るにやア最とも上都合ふ、サア出かけやうと上野の山を彼方に

越し根岸へ下ると左りへ曲り豫て見おきたる其の宅の前へ來り。サア言た家の此家だが己の中へ入るからお前の門外で張番をしてゐて呉ね、何か來る奴があつたらエヘンとかオホンとか言てくンナ宜か己の入るせと八兵衛を門外に待して熊三の家へ入りしが折から家より一匹の猫が熊三の姿を見て驚きながら駈來たりしゆゑ八兵衛の此所ぞとエヘン、オホソソと續け様に咳ばらひを爲すに熊三の喫驚して門外へ飛出し來り。ナニ何者が來たのだ何者がと言ふに、八兵衛の功名顔に。ナニ大きな猫が駈て來たからとの馬鹿らしき挨拶に熊三の怒るが如く。己が言たの誰かい通り掛つたら知らせるといふのだ、猫が出て來たからッて驚されて堪るものかと咄やけば八兵衛のまた頬を脹らせ。それでい通り掛つたもの計りを相圖するの、か家から出て來た者の知らさんでも宜いのだナと云ふに熊三のいよく煩悶がり。エ、お前の鈍馬な事計し言てるヨ家から出て來た奴が有たら猶の事、派出所へ訴へに行ンだから相圖所か出た奴を引と



らへさきやアあらねへ。八兵衛のそれ見たかと言ねばかりに。シテ見りやア今の猫だッて派出所へ訴へに行たのり知れないぢやアあいかお前が餘ッぽど鈍馬事言てるのだと言ふも随分をかしく話し熊三の吐きおがら再び家内へ忍び込み良まばらくして言し如く五百圓の金を盗み出し來りその内二百圓分て八兵衛に對ひ。サア是の本夜の割賦だ己の方が百圓多いから氣に入らねエか知らねエがマア我慢をして取ておいて呉るが宜い何れ二三日の中に又た平均せを爲るからと手渡さんとするを八兵衛の受取す。己の金が欲しくて來たンでかいから是の賈はあいかはりに昨日の日にでもか前が捕まつた時私が一所だつたといふ事を白状ないやうに仕て欲しい、何れまた明日逢ふと言つゝ袂を別ちて去むと爲るを熊三は無理に止めて。アモ此の金を取てくれあいで己が困るから如何か是の取て置て呉る様にも無理に其の金を渡さうと爲るを八兵衛の受とらじと爭ふうち熊三の手持たる二百圓の金を無理に八兵衛の懐中へねぢ込で

逃出すより八兵衛の驚きで跡を追かけ漸うの事で熊三を捕へ件の金を懐中へ捨こむが如く返したるうへヤレ是で一安心とホツと思を吐きつゝ見るといなしに足下を見ると五十圓包が一包落ちてゐるゆゑ諸の今が九争つた時懐中より落たもので有うが夫にしても熊三に之を返さずて二百圓の金を分て貰つたも同じ事ゆゑ今一度跡を追かけて此の五十圓の金をも返さうと再び跡を追かけしかど早や熊三の姿の見えず是の困つた事にあつたと茫然して佇止をりから背後よりコリヤと誰何するものがあるうら喫驚てふり向と何日のはどよりか一個の巡查が來てゐて直にも引とらへむと爲る容子あれば八兵衛のへいと言ながら其まゝ逃足出して逃掛るを巡查の逃さじと襟元取つて引するんと爲るを漸く引をづしたりと思ふ折から女房がコレとゆすぶり起すに目が覺めて見れば女房のお春の案じ顔で。か前さんの如何か仕たのかねエ大層ナうあされ様を仕してサア御覽ピツヨリ汗をかいてと云ふ女房の顔を見て八兵衛の涙をボク



りく、とこぼし。コレお春おまへどの斯して三年越に今日まで睦ましく暮して来たが思ひ懸かい事からお前と別れねばならぬ様になつて、と思ひ懸ない夫の言葉にれ春の不審に眉をひそめ。お前さんの時々さういふ事を言て私を驚かせるヨ、又聞て見れば詰らさい事件おんだらうと言ふに八兵衛の頭をうちふり、イヤ、本夜の事計りの實に大變だ如何にお前の様あものでも是と聞たら直に暇状をくれと云ふだらうア、おさけさい事よなつて来たと嘆息するにお春のいよく心が心ならず。お前さんの様にさう一身体心配ばかり仕て居ての分らさいから、マアどういふ事か話して御覽いくら妾の様なものでも又た好い智慧が出るかも知れさいからと言ふに八兵衛も起直りて。いづれ話せば愛相を盡して直に離縁して呉と云ふ事知れてゐれと去とて此ま、言ずにゐられぬ事ゆゑ話して聞せるがマア驚かさいで能く聞て呉る様に。何を藏さう己の前刻仲間の熊三に誘はれて根岸の或る家へ泥棒に入つた、と計りでの能く分らさいが宵に

ツラくと寐入りし折から門の雨戸をトンくと敲くものが有るので誰ぶらうかと聲を聞て見るとアノ熊三で、今時分に何用があつて来たンどといふと本夜中に是非仕たい儲け口があるからお前を誘ひに来ンだといふから、夫の有がたいけれどモ、寝たもんだから成ふ事お前明日よして呉と頼んでも熊三の中々承知をして呉ぬので詮事をしに門戸を開ると、此所での話しが出来ぬから少し歩いて呉と言てトウ、己を上野の公園まで引ぱり出し、是非己の相棒にあつて呉れどの頼みだが、いくら貧乏をしても他人の物品に手をつける己でないからとキツパリ断ると、熊三奴の憎いこと、お前が行て呉さくば呉れさいで宜い其かはり己が捕へられた時、かうくでアノ八兵衛といふ男も同類だと言へばお前の行ても往なくつても同類といふ廉で後へ手が廻ると吐すから己も據どころ無く一所について往と根岸の何どのいふ家へ入つて大枚五百圓といふ金を取出し、其中己に二百圓呉れ様とするから無理に押返したと思ひのや、五十圓だけが足下に落



てゐるから夫も返さうと仕たが熊三の早や何方へ行たか影もあひゆな  
 然行立てると何時の間にか巡査さんが後へ来てゐて己を引捕へ様とする  
 から己の喫驚して逃やうとした所でお前が助勢に来て呉れたのだと隙ふ  
 を聞くより女房の喫驚。いくら正直者が宜からつてお前さんの様々のに  
 も又た困るヨ自分にさへ暗いことをした覺えが無くバ熊三奴が捕へられ  
 た時に何といはふと恐ろしくも怖くもなんとも無いに假令お金の盗ぬに  
 仕ても一所に行た時に逃れツヨが有やア仕さい併し夫も行って仕まつた  
 事あら仕方がないから此上の熊三奴の所へ行て其の盗た金を先方へ返し  
 内済にして貰ふより外のない就てはお前さんの手に残つて有た五十圓の  
 金の何方にあるのだと聞れて八兵衛の其邊を探すに五十圓の素より五  
 十圓の端錢さへあければ是の不審と小首を傾け、まばし考へゐたるが、良  
 つて心着しもの、如く、それで巡査さんと争つたとき五十圓の落したに  
 違ひない、エ、失敗た事を爲たど悔ひに女房の二度びツくり。賣て其の

五十圓のお金があるど熊三奴の所へ行て話を附やうと、五十圓のお金が無  
 くバ向ふを説つける事が出来ぬでさいかと姑しの當惑の眉をひそめしが  
 俄にハハと膝をうち。眞に宜事を考へ附たヨ、妻もかうして年の長たが未  
 だ色香の失たといふでもなければ以前つとめて居た吉原の今久のお内儀  
 さんに頼んで何方へ身を沈めたら五十圓ぐらゐの金額の出来やうからと  
 いふに入兵衛のうらやぶき、あるやど其様して呉れば金額が出来やうさ  
 れと現在連れ添ふお前を女郎にする事のもうも出来にくいと頭を掻にお  
 春の又た。それの妾だつて同じ事、かうして睦ましく暮して居つたものが  
 今さら別れて女郎になるの嫌だけれど此場に臨んで夫を言てをられぬ  
 でんさいか、だから妾のいふもひ断つて女郎にある積りだから妾を可憫さう  
 だと思ふならせとせと稼いで早く妾の身を落籍せる様にしてくれるが宜  
 いと云ふさへ半の聲を曇らせ、浮ぶ涙を袖もて拭へバ、八兵衛も目を潤ませ  
 つい。それで一時の所だけ身を沈めて己の危場を救助て呉れ、其の替り



此事を首尾よく濟せた上の身を粉に赤しても金を調度一日も早くお前を  
 受出す様にするからと是より夫婦の泣の涙で手順をどこのへ吉原の今久  
 へ頼みこみしに同家の女房さんも事の馬鹿々々しさに呆れいろく説諭  
 を爲せど聞ぬゆゑ夫はどいふならべと或る小店へ住こませ漸く五十圓の  
 前借をさせる様にして遣たより夫婦の喜びの一方あらず八兵衛の其の五  
 十圓の金子を懐中にして宅へも歸らず直に熊三の家へ遣て行きしに熊三  
 の幸ひにも氣分あしとて稼ぎにも出ず床に臥しをりたれば夫と見るよ  
 り枕元へ通り。オイ熊、コレ熊三、手前の酷い奴でないか嫌がる己を無理  
 に引張り出して泥棒の類中へ入るとい併しそれを今さら言ても仕方がな  
 いから賣てもこの事にはお前も勤めて發起をさせ前夜入った家へ金を戻さ  
 しに行ふと思つて來のだから己の意見を服膺て盗た金を先方へ返しに行  
 ふ、トかう言へば定めし五十圓の金が不足してゐるから戻しに行く事が出  
 來ぬといふだらうが、其の五十圓の金のナヤンと懐中に持て來て在る、が

この五十圓のお前から貰った五十圓でない、お前から渡した五拾圓の  
 道で落したゆゑ可憫さうなれ春を吉原へ賣て調度たのだ、サア早くウソと  
 言て己と一所に金を先方へ返し、ホソの一時の出來心から仕た事だと詫  
 が宜い詫たから先方でも内濟にして呉やうからと言葉を盡して諭すを不  
 審と熊三の小首を傾ふけ。コレく八さん、お前の夢でも見てるんでない  
 か夫ども又た狐にでも化されたのかと言ふに入兵衛の憤然と爲り。ナ  
 狐にでも化されたんでないかと、人を馬鹿にする、彼程己を驚嚇して連  
 れ行きながら、其様に白を切て、お前がいよくさういふ氣なら仕方がない  
 已だけで先方へ行き、實の斯々いふ事情でと有体に話したうへ五十圓の金  
 だけ返す様に仕様からと怒つて立かけるを熊三といめ。已のお前のい  
 ふ事がサツパリ分らさいけれど、真可狐に化された様でもないから今一度  
 話を聞ら、能く聞たらうへで詫る様か事があるから詫も仕様からと尋ね返す  
 に、八兵衛の猶さら怒り、とても其様云ふ事を言てる様で、話が出来ないか



ら已の已だけの了簡通りにするからか前の勝手にするが宜と其ま、當家を飛出して直に根岸へ行き前夜熊三と俱に來たる家を探せど、トんと知れず、知れぬからとて名前も分らねば聞く事もあらず、困つてゐる所へ近所の人と見えて、箒を持ちながら通り掛りしゆゑ此人に聞かば知れる事もあらうと思ひ。もし一寸と物をお尋ねをしまするが、此邊に前夜盜賊が入つた家の御座いませぬかと問ふに、其人の不思議さうに。泥棒の入つた家と、妙なお尋ねもの、一昨日の夜なら直に此の向ふの酒屋へ盜賊が入つた事ですが、前夜のさういふ事があつた様に、在ませんでしたと聞て八兵衛の落膽したるが併し一昨日の夜泥棒に入られた家があるといふから其方へ行て聞て見やうと右の家を尋ねたうへ行て見るに是とて前夜入つた家の様で、のちし、タガ念のために聞て見やうと内へ入つて容子を聞くに、何も入つた泥棒の熊三に似てゐるので、諸の此家で有たのか、それにして、日があつてゐるの如何した事であらう、兎もみく名乗たうへ五十圓の金を返し

て見やうと、前夜の始末を語りて五十圓の金を戻さんとするに、同家の者等の驚き。お前さんの本當に泥棒に入たので、のちい夢に見たのだから、其様な事を言て金を持歩かず、チヤと家へ歸つて女房さんと呼戻しあさるが宜い、それにしても、奈何にも正直者人だ、此の淋淨に、珍しいと褒賛しあがら有合せし五圓の金を出して、八兵衛に與へ。是の些少だが、女房さんと呼戻す雑費の補充に、あさるが宜いと、言れて八兵衛のこれこそ夢で、のちいかと反對な思ひをして、大きに喜び。夫で、の御言葉に甘へまして、此の金の暫時拜借いたしませうと、厚く禮を陳て、件の金を懐中へ入れ、飛が如くに吉原へ行て、今久の女房へ事の次第を語るに、夫見た事かと笑はれたれど、自分の一圖に夢を實事と、かもしし事ゆゑ、反つて笑ふ人等を怪しむを、必にて頓て、首尾よく女房を引取り、祝ひの酒に酔を求めて、臥したる夜の事、又もや前夜の如く、門戸を敲くものゝ、あるより、借の熊三奴が、白中言た事を根に持て、已に仇をしに來たのであらう、ヨシ、此方も其の覺悟である、と向ふ八卷



に樽がけ有合したる棍棒を携へ卒と言バ打すゑんと氣込あがら門の雨戸  
 を開て見るよ來りし熊三にあらすして警察署の小使あれば借の早くも  
 警察署の耳へ入りしものか斯ての内濟を頼みに行し甲斐あしと愛ひあが  
 ら小使に伴はれて至り見るに何とも知れぬ美麗き室へ通され待間をどあ  
 く立派な洋服を着たる人が出來て己を側へ呼寄るに八兵衛の早や是まで  
 なりと觀念しつゝ恐るゝ近づくに正面に控へし人の己が盜賊に入りし  
 家へ金を返して詫に行たる其の心懸のよさを賞せしうへ此の褒美ありと  
 て又た十圓の金を賜りしゆゑいよく喜び上つて家へ歸りしと思ふと目  
 が覺め是も夢にて有たりける然れど夫とさたらぬ八兵衛の斯々だつたと  
 女房に語るに女房も共に喜びこれといふのも日ごろから互に正直にした  
 お蔭だから此後とも眞法にまゐくてのあらぬ、それの其様とお上より戴ひ  
 た金の如何仕たのだと言れて八兵衛のまたウロウロ。サア己も其金の如  
 何なつたらうと探して見たがねのうら此邊にないから不思議だ、若しや

道で落したので有まいかと思ふが目落したに仕た所が宜でいまいか、  
 その金を手に握つたとして見ると餘り話が甘過るからと漸く諦めをつけ  
 た相だが世に正直な人もあれは有たものあり

ゆめに見て夫をまこと、正直の

かうべに宿る紙幣のいくひら



一命を杖に馬鹿を  
峠へ登る山猫退治

佩む刀の日本ひろしと雖も拙者の右に出るもの非るべしと威張て肩も  
播磨の國途た鞘のわかほの藩士に石橋渡郎といへる武士あり己が劔法に  
秀しを慢るの餘り武者修行に歩きたしとの念願を抱き、上役のものに其の  
由を語りて暫時の暇を頂戴したしと頼みしかど取上げ呉る様なきより  
一度の落膽おせしが又た情々と思ふやう、假令ゆるしに受られぬにせよ斯  
まで思ひ立し事を今さら止まるの残念ゆゑ是非とも望みを達せずばあ  
らず就ての迎も満足に許可を得て出立する事あり難けれバ窃に藩地を脱せ  
むと茲にやうやく決心して内々調度をど、のへたる上、長官を初め知己者  
へそれく遺書をして赤穂を後に出立なし行方さだめぬ旅の空ヲラく  
どこそ歩みを運びぬ、斯て來るといふに來たるの京都にて先づ金關寺、銀  
閣寺、清水寺に東山と見物するうちフトおもひ起せし、鞍馬山の事にて鞍

馬山のむかし義經が牛若丸といひし時分に劔法の修行をしたる土地にて  
今おは僧正坊が栖む由に聞けば彼方へゆきて僧正坊に面會あし一試合す  
るこそ宜けれ、其れにしても鞍馬山の方位も分らぬ事ゆゑ兎も角東山近邊  
へゆきて聞て見むと丸山へ登りて茶店へ息ひ養花くみ出す婆さんに對ひ。  
コリヤ老人近ごろ妙事聞く様ぢやが僧正坊が住でゐる鞍馬山といふ  
の、何方ぢやナと尋ねられて、茶店の婆さんの只さへ曲つた腰を亦た一曲  
して。ハイく、何で御さいまする、口上陳が住でゐる圓黒長屋といふの、  
何方ぢやと仰るので御さいまするか、ハイどうも圓黒長屋と申す長  
屋の承まはつた事が御座いませんが然してッリ口上陳といふの、何とい  
ふ人で御さいまするか此の直に下の方に寄席おどへ出る落語家が御さい  
まするから其の者に聞て見ませうで御さいまするか、ハイ、大分饒じ  
しと思はるれば石橋の苦笑ひして。ハ、ア此者のッン印ぢやあ、まつと大  
きき聲でいはねバ分るまいヨ、く、と獨り言つ、大きな聲をして。コレ



コレ拙者のいふの口上陳でないぞ僧正坊といふ天狗が栖でゐる鞍馬山といふ山の所在を問のぢやと耳の側でいふと漸と分つた様子にて。天狗さまが栖息で在つしやる所で御さいまするか、それ此所からオット北の方に當る鞍馬山といふ所で御さいまするか當時の天狗さま所でいはい大い鬼が出て人を取つて喰ふとやらで近邊へ行く者もございませぬヨ、ハイ、中々怖い山でございます、このほども何とか申す武家様が其の鬼を退治して仕舞と仰やつて鞍馬山へお登りあさつた所がどうして、鬼を退治する所でい有ませぬ山へ登るか登らぬにムリ、と喰殺されて仕舞て骨ばかり残つてゐたのを漸とので樵夫の衆が見出しお悼しいと言ふて持て歸り廣大寺の墓地へ埋葬たとやら貴士も、その鞍馬山をお聞きなされる様で、又た鬼退治にお出かけで御さいますから荒い事はかりをお好みになります、気が壯てゐるもので御さいますから荒い事はかりをお好みになります、鞍馬山ばかりのお出になる所での御さいます、ハイ實に恐しい所で、

これが貴士人間から相手よあり様も御さいます、向が魔の物でございますから中々腕力での参りませぬヨ、また斯やうに申せば無禮な事をなす奴ぢやと仰やるか、存じませぬが、是まで随分剣術の出来る方が鞍馬山へお登りになりましたが一人として無事にお歸りなされた方がございませぬ、妾さとの鞍馬山の風説を聞き、へ身の毛が逆立つ様でございますヨ、どう見あげても貴士の鞍馬山へ行て見やうと思ふてお居でさる様で御さいます、が只今もまをします様か次第でございますから鞍馬山だけの止に遊ばす方がよろしう御さいますヨ、ハイ、鞍馬山へ行て怖い目をあそばそより此の界隈の山猫、京都で、東山の藝妓を以前から山猫といひたりでも聘て、トお遊びあされて、奈何で御さいます山猫の衆もあきたの様な方を見たら化す事もよう致しますまいオホ、と鹿子まばらさ齒を出して勸めて掛るの遊ばせて利分を奪ふとの考へなり夫と云らぬ、渡郎の、ム、何とまをす此の近邊に山猫といふのが居るとナ、そ



れい怪しかる事だ、葦穀の下も其様を怪物が徘徊いたす様で、國家の大  
 事にも隔はる事ゆゑ先づ鞍馬山の鬼退治の後日として差あたり其の山猫  
 を退治ねばなるまい、これを見ても憤りに堪ぬ幕府の専制、葦穀の下に  
 山猫とやらが徘徊するを見捨て置くやど、言語道斷、聽て幕府も其の山  
 猫と共に仆さずてゐるまい、シテ老人、只今まをした山猫とやらん、奈何  
 ある服装をいたし居るにや悉しく話して聞すが宜からうといふに老婆の  
 耳の聾さに前の獨言が聞ぬゆゑ、堅く見えても若い人ぢや私が山猫の  
 話をしてから遊ぶ氣にあらッしやッたと見ゆるヨッ、廿二話しこんで  
 小遣錢にでも有附うかと思、がらニコくして。アノ山猫でございま  
 すか夫の何でございますヨ、皆か可かり立派な服装をしてをりますすが中  
 の餘ほど奇麗なのが御さいますヨ、まかし山猫といふののヂヤレ出すとお  
 客までも揺つく様さ面白い妓が多く、それで御さいますから若く見えて  
 も皆か年齢を長てをります、妾の所へ先刻も遊びに參つて居りました金八

といふ妓の本年三十二三でございますすが、ヨイと見ると廿年か廿一二々  
 ちるに見ぬまをヨ、いくら化するのが業体だからとて能くマアあんきに甘く  
 化したもので御さいます、ハイどうも甘く化ますで御さいます、然して物な  
 めしと云ふ事が御さいます、升から一度聘で御覽さつて、奈何で御さいます  
 る、あまり御散財のかゝらぬ様にして妾が御案内を申しますから、もつと  
 も當地で無暗と知らない方をお上まをささい定期にあつて居り升ゆゑ  
 御勝手にお出なさると餘ほど面倒で御さいますから妾が附て参りまして  
 ね手輕で上る様にいたしませうといふに石橋の大きに喜び。それの拙者  
 より願ふ所だ是非とも其の山猫とやらを退治ンければならぬ就て、山猫  
 を見るに、白中にて差支へのなきものか、ナニ矢張夜の方が宜しからふ  
 と、あるほど敵手が魔物の事ゆゑ夜の方が見と、いくるに宜からん、夫で、斯  
 う致さう、氣の毒であるが白中の當家で遊んでをつて日の落るを待ち案内  
 を願ふと仕やう、イヤどうもいろくの事を願んで氣の毒であるナ、就て、



斯様して空しく待て居るのも退屈だらう、酒があるならサヨイと一本で宜いから出して呉ぬか、肴は何でも宜しい香の物でも水菓子でも、またそれが無くバ大根の生でも蛇の生ても、只だ目に入れた物を持って来てくれと註文をすると老婆の福の神が舞こんだかと思ふばかりに喜び上り。ハ、ハ、ハ、香の物でお飲りなさつて居て下さる中に何か肴をさう中して参ります、イエナ直に此の向ふに料理屋が御さいますから速刻でございますと、慾に壯健な老婆と見ゆ急ぎ立つ、出ゆきたり、後に石橋渡郎が獨りサビく、酒呑み居たるが了得に本宵の山猫を退治する事とおもへば胸といろさて酒も呑めせ。何でも山猫の澤山ある様な話したからコリヤ今の中に何方へ行て加勢を頼みて来んか、イヤ、加勢を頼む様で、拙者の功名にならぬ計りか山猫ぐらゐるを退治るに他藩の武士を頼みしと聞えて、藩主のお名前にも聞はる事ゆゑ是非とも單身で退治してくれん、ヨ、數おほくも山猫の事おれば何はどの事かあらん、酒に勇氣を附けたる上日

の暮るを待て出掛んと是より氣を取直してグイ、グイと飲出し一本二本と跳子の數を重ぬるうち日も山の端に入相のかねて約せし時刻も来れば去來これより山猫退治に赴んど老婆に案内を頼めば、丁度宜い時刻にありましたと老婆のいそぐ先に立て程遠からぬ小料理屋へ伴ひ。然して旦那の若いのが宜しう御坐いますか但し又た年齢を長たのが宜しう御坐いますと聞くに石橋の肩いからせ。さうで退治るから一匹や二匹の面倒あり、東にある程連れて参れと言ふに當家の者等の喜び、コリヤ宜いお客が飛こんで来た、それでの三毛吉さんも班八さんも誰も彼も大勢聘で来るが宜いと使の者を走らせるに間もあく入り来る多くの藝妓、跳るやら舞ふやらの藝盡し。了得の石橋も其の美麗さに勢ひを呑れ柄に掛たる手もゆるみしが良あつて心づき末坐に待りし茶店の老婆を招き寄つ。コレコレ此の奇麗な女が皆か山猫の化たのかナ、と聞に老婆のうらうらあづき。ハ、イみんな山猫で御さいますヨ、さうして貴郎向ふに坐つて居る女なぞの本年



三十六でございすに未だ廿二三にしか見えませぬ、實に甘く化たもので御ざいますオホ〜〜と言葉も漏がちな齒を見せて愛嬌わらひを爲せり石橋の猶能く取糺した上で残らず切斃して呉むと刀の目針を濡しあがら。いかにも巧に化たものぢや、シテまた彼の中で何の女が一番古猫ぢやナ、ムーナニ右の方に居るのが一番古猫だとまをすか、さすれば他の猫等の配下ぢやナ、配下でもおいとすると皆あ夫々籠つて居る所があるのぢやナ、ヨシ〜拙者の是より彼奴等を一同に退治してくれるから和女の彼方へ参つてをるが宜い怪我を致してのからんからといふより早や衝立に老婆の大きにうち驚き。貴郎のマア血相を替て如何おさるんで御坐います何のお氣に障つた事があるなら妾に仰やつて下さいまし貴方のお氣の濟む様に致しまするからと前を遮つて押といひるを石橋の突遣りさま進んとするに居合す仲居も肝を冷し、怖々あがら袖にすがり。マアどういふ事件がお氣に障つたのか存じませんが斯して妾等がお側に侍てゐて貴士

様の御機嫌を損じましたと親方へ聞えましての濟ませぬゆゑ何卒妾等へ斯々だと仰やつて下さいましたら貴士のお氣が濟ます様に何様にも致しませうから兎もかく舊の座へお坐り下さいませす様に頼めど止めどいッかお事、石橋の後へも退す、聲あらいげ。氣に障るの障らぬのと左やうな詰らぬ事でのないッ畏れ多くも此の都下に化猫おどが徘徊いたすを聞き知りあがら退治ンでい、禁廷へ對して申し分あし我れ不肖ありと雖も武家に生れ斯く両刀を佩帶む上此ま、身を退けるが如き卑怯な事ないたさぬ、一命を抛つても斯る妖怪を退治、國家の妨害を除く決心あるぞ、サア退け、退きをらぬか、これほど申すに未だ支へ立をいたす様あら其方等も俱に切捨るぞと敦圀わらく罵るに仲居と老婆のいよ〜驚き。コリヤ大變あるかと料理番おどが馳來りしかど相手の強勇さうお武士ゆゑ我近づきて取押へんと爲るものもあく荒くれたる男等でさへ此様おれば況てや藝妓



等の座敷に居堪まらずして皆なハヤクと逃出すゆゑ今石橋も猶豫な  
 らずと支ゆる二女を突飛ばしあがら一番古猫と聞く三毛吉を引とらへんと  
 爲るに三毛吉ハアレと叫びて身をかはし女あがらも一生懸命傍に有合せ  
 し火鉢を取より早く投附たるに灰の四方にパツと立て了得の石橋も進み  
 かね、己と言たま、逡巡る暇に三毛吉ハ五六間逃げ延たるを逃していと又  
 た追駈ゆくに三毛吉も捕へられてハ一大事と足に任せて駈れども何でう  
 石橋に適ふべき、祇園の鳥居を南へ抜た所まで何やら斯やら逃行きたれ  
 ど今息さへ絶ぬ計りに成りて早や足さへ運べねハ思はず知らず傍の家  
 へ飛込たるが當家の機關的を營業にする家にて三毛吉どの日來親しくす  
 る計りか、逃げ込み來し容子の只あらねハ氣轉を利せて其ま、裏口へ逃さ  
 んど爲る所へ石橋が拔刀を携て断こみ來り夫と見るより小柄を抜てエー  
 と投つくるに狙ひの外、的へ當り、ガタ／＼と音のあして天井裏より  
 コーと現れ出しハ女の幽霊、不意をくらつて石橋ハ喫驚、二足三足さがッ

て身がまへ。儲てハ豫々聞て居りし怪物邸との此家あるか、惟ふに山猫奴  
 が逃ると見せて此家へ引入れ我を殺さんと謀計ものあらん、假令い、かある  
 妖怪變化の出るとも驚く様な拙者にあらず、出るからハ一度に出よ、残らず  
 退治て吳んずと、刀を頭に振かざし睨まへ立し状況ハ恐ろしくも又ハ馬鹿  
 らし、然れハ此家の主人ハ心で恐れ口で笑ひ。どういふ事が有たのか存  
 じませんが、貴士の様にさう拔刀を持つてお居でにあつてハお話しませす  
 事も出来ませんから、兎も角その拔刀を鞘へ納めて下さり升やうに願ひま  
 する、と頼めハ石橋ハうち腹立ち。コリヤ何をまをす拙者の萬民の害を除  
 くため山猫を退治に參つたものだ、さういふ汝ハ怪物の親分ぢやナ、ヨシヨ  
 シ汝から先に退治てくれんと切て掛るに主人ハ飛のき、是も有合せし火鉢  
 を目潰しに投て辛くも裏口より逃出たるが石橋ハ何おもふたるか主人ハ  
 跡を追て天井に下りゐる怪物人形を刀で切落しつ、左も功名さうに泊り  
 ゐる旅宿へ歸り來り主人や手代を我が部屋に呼入れて右の人形を示し、と



うちや拙者の剛膽なるに實お驚き入つたであらうといふに主人と手代  
 の笑を含み。是の又た妙あものを取てお出ささいましたす、からくり的  
 いふもの、手拭や扇の様なものを景物に出すので御さいます貴士の  
 其様で御さいません、機關的の人形を皆な持てお歸りになつたので御さ  
 いますす、よく是を先方で呉ました、と聞て石橋の目に角たて。コリヤコ  
 リヤ其方達の何をいふのだ是の拙者が一命を的にして退治て来たのだ其  
 様の手軽く取て来たものであいつ、能く物を見てからいふが宜い、斯して怪  
 物を退治た拙者の腕力に恐れ那の山猫さども早や何方へか行であらう、さ  
 てく、良い事をしたと喜び返りし石橋の馬鹿氣た容子、可笑かりける

山猫の異様し武士が

からくり的の怪物退治



妙な薬をモルヒネより  
 劇しい醫師のヒサコ

性昔の上等醫師さんだといふと四人昇の駕に乗てお大名の行列を見るや  
 うに威張ちらして歩いたものだが當時でい世が開進たから醫學博士とい  
 ふ様な立派な醫師でも抱腕車でガラ／＼と出かけられる手軽さ、夫に  
 反對本郷元町一丁目に住む馬井御橋といふお醫師どのの病家から迎へに  
 來てもナヨツク一寸の出掛けて行ず併し是ほど容体ぶるも無理のさい  
 事にて此の馬井氏の何といふ國へ航つて習ひ覺えて來たか一種特別の治  
 療法を施行より俄に馬井氏の名の遠近に響き渡り日々玄關先へ詰かける  
 患者と薬取の停車場の出札場も宜しくと云ふ様を体裁にて薬局の書生の  
 手近にある回死薬を服みく、薬を調合するはとあり、今日も午前八時より  
 といふ診察時間にも關はらず七時でるより詰かけた患者の玄關に充滿、頓  
 て八時の時計がチン／＼と鳴を相聞に馬井の診察所へ出來り宛然法廷で



判事が原被告を呼入る様に番號札に據て順次に診察所へ入り行けるが第一番に進み出し患者の四角四面な顔色をかし左右の肩さへ夫婦の岩を見らるやうに、ツツ張して奈何ある難病ぞと見てゐると附添ふ母らしき女が。妾の宅の柳橋でございまして營業の料理茶屋を致して居りますがモ、此悴も好年齢になりますから帳場へ坐らさねばありませんに御覽の通りの容態で如此な体裁でのお客が嫌がつてお出くださいませんかから何卒この四角張た身體が直る様に仕て戴きたいと存じまするが、如何でございませう是の直らぬもので御さいませうかと聞くは馬井のニツコとうち笑み。チアニ案ずるに、及ばぬ事一週間も薬を服ば直りますヨ、サア方書を上るから彼方で取て歸りあさい、然して薬の服薬と膏薬とを上ますゆゑ双方用法通りするが宜しいと方書を渡して退る後へ恐々仕あから出たるの十六七の娘にて是も附そふ乳母が口添へ。アノ何で御さいますお嬢さんの他人に言ふとがお嫌ひで、それも嫌ひなら仕方がない様なもので御坐います

けれど人さまがお出になつた折御挨拶もあさらず又た御両親が物を仰やツても返辭さへ遊ばさぬので御両親の眞に御心配をあそばし、あれでい迎も他家へ嫁入せる事が出来ぬから何程お金が掛つても構はぬ何卒アノ病痾を直させる様に仕たいといろく手をお盡しあすつても直りませぬので困つて居るであさる所へ出入の人が来て先生のね噂、それでお前が附て先生のお宅へ参り能く御療治を願つてくれどのお頼みで如此して参りましたので御さいますが何分よろしく願ひまをしますると陳るに馬井の點頭つゝ。少女の物をいはぬの世間一体の事で別に案じた事でお御さらぬ、今日あける薬を二三日も服ば驚くやと言が陳る様にありますと方書を與ふるに乳母の喜び。それで御免遊ばせと暇を告て立つ後へマツツラ出でたる一人の男の年齢三十二三にて寝ざめ淋しきあかつきの衣の見えるもむさし野の薄に似たる頬髭を捻くりあがら告るやう。へい先生わつちやア御覽あすツても分りやせうが腕車を挽てる入てエもンですが、今ま



での仲間の奴等に負た事が有やせんが近ごろ如何した事か、いつも挽く  
 らを爲る毎に敗ちまッて口惜ッて堪りませんから先生の所へ御厄介に  
 ありに来たンですが、どうでせう早く駆られる様にして戴けやせうか、馬井  
 の聞つゝ事もあげに。なやるともく、何でもない事たとは是れも例の通り  
 方書を與へて歸した後へオホンと一咳して膝進ませしの嫌忌氣たッぶり  
 とした若年生、まづ衣服をつくるひながら襦袢の袖口で口頭をおほひ。モ  
 シ先生眞に如此事の陳しにくふ御坐いまするが、實の何んで御さいます  
 る私の兎かく女に惚られ過て困りますが貴郎の御配劑でナト嫌はれる様  
 に成ますまいで御さいますせうか彼方へ參つても此方へ參つても女に取ま  
 かれて眞に夏蠅てありません、昨夜も昨夜とて朋友に誘はれて新橋の或る  
 待合へ遊びに行くも出て来た藝妓の若妓ばかり、私の方からの碌々物も云  
 はぬに指さ馴々しくして本宵のモ一遅くあつたから泊つて行ッしやいと、  
 子、あかた言て、そして、私をおなた、と言つゝ、目ダレを滴すので了得の馬

井も一番閉口なし。コリヤ余ッ程難病だ女の惚ない療治をするより他人  
 の前でのろけ散す此の病痾からして直さず成まいと思ひながら本人へ  
 の宜しい案とあさ、私か薬を配て直して上ませうと、うけあひながら藥  
 局へ廻しぬ、是より種々の難病者がかはる、診察を請ふを皆な濟して歸  
 せり、偕て右の患者の一人ある八といふ車夫の馬井方にて藥を貰ひ家へ戻  
 りしうへ聞しごとく外藥を火氣にかけて足へ塗つくるに、不思議や足の輕  
 輕上りて苦あしに駆られるより、なるやど是の妙だと感心しが、毎朝仕  
 事に出るをり外藥を足へ塗て出るを規定どかし居たるが、或時兼て愛顧に  
 なる旦那先から吉原へとの註文が有たゆゑ今日こそ旦那が目を眩され  
 るほど駆て駆て駆ぬけむと前の外藥を出し馬井より聞し分量を過して無  
 暗と足へ塗立て、サア是でトッサリ御祝儀に有つけるぞと喜び勇み勢ひよ  
 く腕車を挽て旦那の宅へ行き夫より駆出しさるが早いとく、何の腕車も  
 此の腕車も拔ぬ車がないので旦那の大悦び頓て吉原へ駆込で伊勢久の店



先へ威勢よく着やうとするに足が止まらず、アレといふ間もなく硝子戸へドンと突當たから堪らない、旦那の中より投出されて腰を強く打ち、アイマク、と起も上れず、八の楯棒お執まつたま、宙ぶらりん、そして如何した事か兩方の足を未だ頻りに動かして歩いて居る様も体裁、それを其邊に居合せた車夫が寄て扶けたはどおかれ、御祝儀に有つく所か大小言を頂戴して這々の体で宅へ歸り。一体マアどうした事だらう是の薬の分量を過したので如彼事になつたんだらうか、實に不思議な事だ、マア先生の所へ行って見やうと直に本郷の馬井方へ遣てゆきしに、今日の幸ひ來てゐる患者も掛けれバズーッと診察所へ通るゝ馬井の見るより笑貌を作り。オーこれの八さんか、どうぢやナ能く駈られる様にかつたのナ、その容体によつて又た藥劑を上やうからといふに、八の自分の名前を額に寄て。時に先生實に誥らねエ事がオツ初まりやした、おんだつてマア聞ておくンねエ、今日平常愛願になる旦那が吉原まで遣てくれると言れるンで思ひつきり外藥を

塗ッて出かけると駈られるとも駈られるとも自分の足でありながら駈てる事が分らねエやど能く駈られるので、イーエ先生そのの宜ツた何んてエ様な事でもないの、いつも行れる伊勢久の店へ威勢よく、イーエサそれもズーッと着たのから宜しいが、着やうとしても足が留らねエので、トウ〜硝子障子へ突當て障子の毀れる、旦那の轉げ出す、實に面目玉を踏みつぶした次第サ、それも宜が不思議な事にやア私の楯棒を持たま、宙ブラリンに寄つて足ばかりが勝手に動いて居て今思ふと器械の龜の子を見た様だツたらうと想はれますせ、一体これの如何した事さンでせう餘り馬鹿〜し〜して他人に話も出來やア仕ません、今も家へ歸ると女房が其様な事だア知りませんから、今日の宜い事をしたチエまた何日の様に御祝儀の半ペラだらうてエンで、いよく馬鹿らしくさツちまつて、ボンヤリ此方へ遣て來やしたが矢ッぱり何でせうの藥劑の分量が過たんでせうかと尋ねるに馬井の苦わらひをして。それのマア大變な事だツた、如何にも彼の薬の分量を



過すとさういふ間違が出来るから藥局の者から能く言た筈ぢやが。それ  
 の藥局の方から能く聞たんですが、いつも愛顧になる旦那だし況て行所  
 が吉原でエソでソイ餘計に外薬を足へ塗つけやしたが、それで分量が矢  
 ッたり過たからです、して見ると彼の薬の餘ッほど劇い薬だと見えませ  
 が一体何でこせエた薬かですか。彼か、彼の何だ極く良品石炭から製  
 した薬で夫へ火の氣をかけるから謂ハ蒸氣力で足が動くのだ、それゆゑ分  
 量が過ると留やうと思ふ所で足が駐らぬので宛然アノ氣車が障害物に運  
 過て俄に車を止める事が出来ぬのと同じ事だ、其所で先づ今言た伊勢久へ  
 着け様と思ふなら土堤あたりを其の積りで足をゆるめて駈かといか  
 ぬのだと教ゆるに、八も借のさういふ事でありしか夫にしてハ石炭薬を足  
 へ塗すぎて足が破裂しかつただけが未しもありと吐きながら歸りゆく、  
 肩摩て入ッて来たハ何日も娘に附て来る乳母にて是も馬井に逢て眉を擧  
 め。時に先生今日あがつたのハ外の事でも御さいませんがアノ薬をい

ただいからお嬢さんの物を能くいふやうにお成りなさいましたハ眞に  
 結構でございますが、あれぞ不思議な事にハ人のいふ事を計りお眞似さる  
 ンで實に困ります、彼ハ如何した事でございませうと聞れて馬井も不審  
 はれず、アノ娘に與た藥劑ハ雀を黒焼にしたるものあれば只だ物をいふ様  
 になる筈にて人のいふた言を眞似るなどハ不思議千萬、これハ藥局の者  
 が若しや間違て外の薬を運てゐるのでハ有まいか、夫あらハ實に不都合  
 り、兎も角藥局の者を呼て調べて見むと呼鐘を鳴して藥生を呼寄せ、さて斯  
 斯言て來られたが若しや薬が間違ふてハ居らぬかと取調べて見るに奈何  
 にも薬が間違ひをりしと分りしが其の間違ひし薬といふハ似隣家に與へ  
 る鸚鵡の黒焼にて有たりしと

雀はど詫言を轉るお醫師どの  
 飛だ小言にあふむの黒焼





蜘蛛の巣に確が引掛つた  
生徒の馬鹿を見る嘘學校

今回嘘言を築地の二丁目へ建築したる一個の學校あり是れ何を教ふる學校にやと通行の者等が立寄て見るに門頭に掲げたる大板に「嘘言私塾」の四字を記せり、然れば取も直さず嘘言を教へる所あらんか、去とて又た妙な學校も出来るもの哉と、互ひに噂を仕合ふ、中よも是れどういふ事を教へるのか一番索見に行つてやらうと氣樂ものが二三人で出掛け、エー頼みませうと案内を乞ふと、ドレといひあがら出て来る年の頃十五六の少年。先生に少しお伺ひ申したい事があつて參つたので御ざいます、御在塾あらすヨットといふと少年の横柄に。ハ、ア先生に面會致し度と仰やるか、是れどうもお氣の毒ぢや、先生の夜前急に用事が出来て仙臺の方へお出にあつて、左やう、お歸りの來年の國會開設時分にもありませう。へ、エそれでは先生が在ッしやらさいのです、先生が在ッしやらさいとして見ると、他の

方でも宜しうございます、何誰か此の學校を預つてゐるお方がございませうから。あるほど學校を預つてゐる者に逢たい、これもお氣の毒さまでず學校をわづかつて居る者の二人あります一人の早見、また一人の田村、この早見の方の條約改正の事について或る黨派へ雇ひ込れ在へ出かけました、是れ在方の者へ嘘を吐て建白書へ調印をさせる様に、そして田村の方の嘘種取調のため京坂地方へ出張しました、當今で私一人で實に困ります併し私でもよろしく御用事を承はつて置ませう。ヂヤ仕方がない貴郎ンでも聞きませうが、全体この學校でどういふ事を教ふるんです。さやうです先づ最初の、オイ車夫神田まで遣てくンナ、へいと云て車夫が腕車を挽出しかけると、オツとまつた神田の嘘だつたといふ様々のが最初です、それから中等科にあると掛取の言わけ、今夜のどうしても金が出来から拂金を上るヨ、イエ決して嘘言でいさい此通り他所から手紙も來てるんだ、あと、掛取を歸し、またメツと上等科にあると嘘言を利用して事業を初め



るなど實に入ッて見あい中にお話を致したからとて分りませんからマア試みに一週間ばかり入學して見あさるが宜いト、もつともらしく陳たるゆる素見に行た連中の、うれで明日からでも来て御厄介にあッて見ませうと心の中に舌を出しつゝ、歸ッて行くと右の少年がコレ／＼と叫ぶ故、何か忘れ物でも仕たのかと立ちどつて見ると。イヤどうも失敬、只今の皆さ嘘言で實の先生も在宅ですからマア此方へお通りなさい。なほ先生から委しきお話しもありませうからとの事に、一同も、あるは嘘言を教へる學校はどあつて、違つたものだ、受附の奴までが彼様な嘘言を吐やアがる、受附でさへ彼だから先生何様な嘘言を吐かも知れあいから、素見次手だ座敷へ通ッて一番嘘言を聞て見やうと、これより應接所へ通ッて見ると、冷たい中にどうかお飲み下さいとコーヒー茶碗へ蓋をして持て來たから、お構ひなすッて下さいますナ然して、ト言つゝ、何であらうかと蓋を取て見るに中の虚ッポゆる又た一ぱい喰たかど呆れてゐる所へ靴ふみ鳴して

出て來たの立派な洋服を着た人で。私が當塾主瀬川とすすものですが、どるか貴郎方の嘘言のお稽古をなさりたい御容子、もとより嘘言とまをすもの、他の學問と違ひ、此所を如此して如彼してと手を持ってお教へまをす次第に、お参りませんから、ホンの大体の所をお教へまをすまで、其他の御當人の智慧次第で何様な嘘言でもお吐になるのが宜しうござる拙者さども嘘言を修業いたすため嚮に西洋各國を巡回いたしたが何分西洋でも嘘言を教へる完全な學校がないので、左のみ得る所が有ませんでした、何でも嘘言の己の心の働か一途です、マア明日あら兎も角、來てござらんなさるが宜しい、近ごろの私が大變いそがしいので娘に代理をさせて置きますが、娘も中うまく嘘言を吐ますから、却て私より評が宜いほどです、只今その娘も御挨拶に出しますゆゑ暫時これでト待して置き乍ら立て行たまゝ、自分も來なければ、其の娘とやらも出て來ないので是の如何した事かと聞きに行く、と彼の皆な嘘でモ、お歸りあされて宜しいと山の上から谷へ突落された



様も目にあつたので了得の素見連もあるはと是でこそ嘘言の學校だと感  
 心しあがら歸つたので、是等の連中から猶さら評判を立て、我も行ん已も行  
 うと皆あ教はりに出かけるので嘘言私塾の大繁昌、此の風評を聞た横濱の  
 尾上といふ男が如何の嘘言學校へ入つて立派に嘘を吐く様になり外國へ  
 航行つて縁眼兒を一番嚇かして遣りたいと思ひ早々前の嘘言學校へ行き  
 しに例の校主、瀬川が會つて。只今の何の級も満員にて皆あお断りまをして  
 居る所だが、さうして態々横濱からお出でにあつたものをお断り申す、お  
 氣の毒を次第ゆゑ特別お計ひにて御入塾をお許しますが、就ての前以て  
 一寸とお話し申す事がある原來拙者が此の嘘言學校を開設したといふ主  
 意の條約改正に依つて内地雜居を許される曉にて洋人の續々内地へ入こみ、  
 機械場を設立するわれは鐵山事業に着手するあり、思ふが儘に利益をせし  
 めるを見あがらも是に敵する資本の薄き我國人等の奈何とも爲る事あた  
 はず、此時に臨んで拙者の我が學校にて養成したる嘘言生を四方に放ち、西

洋人に種々なる嘘言を吐て一度奪はれたる所の利益を手も溜さきに取戻  
 すの覺悟ゆゑ、我が塾生たらんと望まるゝ人等の此邊を能く心得居られた  
 きものあり、曾に嘘言をして掛取に試る位も止めるの残念の次第あれ、ト  
 悲憤の色を面にあらはし述出だしたる校主の言葉に尾上の大きに感心あ  
 し。先生が左やうな思召しよて御されば拙者とても喜ばしい次第、屹度立  
 派な嘘言家になつて見事洋人を驚かすで御さう、就ての今日より直に入  
 塾を願ひたく存するが奈何で御さいませう、ト聞くに瀬川の異存あしとて  
 順て教場へ伴ひ入れ、他の書生等に照會せ、それより教授を初めたり瀬川の  
 先づ尾上に向ひ。私が此間夜谷中の墓地を通り掛るとモノ／＼と呼ぶ者  
 があるから、ハテナと振返りて見ると白い衣服を着た女が来てサメ／＼と  
 泣くから、借の金でも遣して死だ者の幽霊だ、ト聞て遣て見ると。ハイ妾  
 のあなたも定めしお聞き及びで御さいませうが此の墓地へ埋葬れてゐる  
 高橋お傳とまをすもので御さいませうが、トした事から先ごろお亡あり



あすつた、西野文太郎さまと割あき交情にあり、忍びく密會て居りました  
 を他の亡者の衆が見とめ、岡焼をいたしまして兼て妾へ懸想いたし、どうの  
 斯のと、いやらしい事をまをします三太といふ悪い者へ告ましたので、其  
 の三太の自分へ妾が靡かぬの、西野さんが有ての事ゆる西野さんを生し  
 てしまふと、昨今よりく相談を致してをりますゆゑ、もし文太郎さんの  
 お身に變ん事があつて成ませんから、どうぞ妾を救助るとおもひ、何か  
 宜い智慧をお貸しあすつて下されどの頼みなれば私も一時の困つたが、か  
 ういふ者を救助して置てやると死だ折に宜い場所を世話して呉やうと思ひ、  
 傍の石に腰を掛て、いろく考へたが如何も宜い考案も出ぬので詮事を  
 しに□□□氏の所へ行つて相談をして見ると、それでの萬事拙者へ任して  
 置れよとの事に、此由をお傳に聞せて歸つて来たが、二三日經過てお傳が私  
 の所へ禮に來たがその時持て來たの此の饅頭で、幽霊が呉たいけ饅頭か  
 ら火が出るよ、袂から一個の饅頭を出して火を點ると中に鉛の替りに

煙硝が入つてゐるので、ホッと火が燃出したので、尾上も成ほど嘘の學校だ  
 けいろンお機械が完備てゐるナと、いよく感心するに就て、餘り今の話  
 の嘘が知れ切て面白くないが是のどういふ譯かど聞て見ると。是のホッ  
 の小兒へ教へる嘘で初めのマア如此ものから徐々遣り出すので、併しか  
 前さんの方の學力に依つて上等科へスト直に入ても宜からお前さんの  
 方で一つ何か嘘を吐て見るが宜しい、嘘の吐やすい様に題を出して上やう  
 「友人に吉原行を誘引れた時の奈何ある嘘と吐て通る、や」サア此題で遣る  
 が宜しい、まだ是にても嘘が吐にくく、バ私が其の朋友にあつて上やう宜し  
 いかナ、マア門をガツくと開て入つて來ると、今日の、相替らず御勉強かナ、  
 時に是から吉原へ全盛遊を見に行うと思ふのだが、一所に行つて呉れたまへ、  
 サア此所だ、何か嘘を吐出ささいで困るでないか、さう黙々てゐて。チ  
 ヤ嘘言を吐出しますよ、アイタ、ハ、どうも宜い所へ來て呉れた、恐れ入た  
 が横町の賣薬店へ行つて何か薬劑を買つて來て呉れ給へ。サア其邊の嘘言が



どうも拙い、もし朋友が薬を買って来てくれたら苦い薬を服なくばなるまい、お負に薬代を損する計りか、其の朋友が側に附てゐて介抱をして呉れたら據せざる無く病人の眞似を仕さくば成るまい、また快つたと言へば行かうといふし旁々もつて不都合千萬、さういふ時より斯いふ体裁にするのだ、左も行きた相も見せて。どうも行きたい實に行たくって堪らぬけれど、今日も行けぬ何故といふに、今日の父親の亡なつた日で遊びに行てゐるから平常の兎も角、父親の命日だけの精進でも仕て遣らないとお袋が氣持を悪くするから、然して全盛遊の未だくあるから今夜も限つた事のあるまい、夫れに又た今に親類の者も来るから今夜はどうしても宅に居なくばならぬいと、程よく嘘を吐けば朋友も夫でもどの言ふまいから。なるやど先生の先生だけ實に恐れ入りました、是からさういふ様に萬事遣つて見ませうと昨今まきりに勉強してゐる由あれば今に立派な嘘言家にあるで有りませう

生徒の數も百千萬八と

うそを築地に開設た學校





目先の見ゆぬ俳優の思附  
にのお客も呆れて暗闘場

ア、でも面白い斯でも面白いと考へ出す趣向のいつも新富町邊に住て狂言の改良に熱心なる市川頑藏といふ俳優ありけり此の俳優少く學問の舞臺を踏かため英語もハアレンの萬國史ぐらゐのわけ幕あら覗き込だので兎かく金襖の開閉が氣にいらす、なんでも目先の變つた狂言をして看客の目を驚かせ度と、日夜思考を仕てゐるほどあれは改良のためから本當に決闘でもして死んで見るとの飛ぶ執心、今度も一狂言妙な事を考へ附たからとて外の俳優等を招いての相談。さて斯うしてお前さん達に来て貰つたの外の事でもないが此度の演藝に本當の改良狂言を演たいと思ふので、その相談を仕やうとわざわざ呼に上たのだが異存あしむウンと言て貰ひた

ていならないのだ、それに今日まで仕來りの演技で、其様を事に頼着あゝアノ五段目の夏だといふに與一兵衛が綿入の衣服を着たりあゝか爲る様を事で實に不都合千萬だ、此の様も不都合な狂言を觀て居るお客もお客から演てゐる俳優も俳優だ、併し夫も以前なら是でも宜が開けた上にも開けた明治の今日で、右様も不都合を斷然止して、ある程彼の狂言の時代に、如彼もので有つたらうかと、觀客に思はせる様に仕なくばならぬ、就て、私



為世話をするのが道だとい言へ兎角當時の藝妓の金のある間こそ宜くす  
 れ金が無ければ一昨日お入來と愛相を盡すものだが實に三吉といふ妓の  
 當時の藝妓に似合す感心な女だ併し、若旦那の身を如舊にするに其様所  
 に置くの宜いから何方か外方へお置きまをす様に仕やうト其三吉の宅  
 へ尋ねて行き、若旦那に逢つたらへ、いろく意見をする事よろしく有て  
 自分親類が八王寺にあるので其方へ當分行てお居でさるが宜しい  
 と勧め、二人も其事を承知したもので、情にからまれて別れかぬる愁嘆萬々  
 あつて、若旦那のいよく八王寺へ行き三吉の相かはらず藝妓をしてゐる  
 うちつとした事から二三度喚ばれた職人の駒三といふものと割あい交情  
 ばかり、今の若旦那の事もわすれて巫山戯散してゐると其様事と知らぬ若  
 旦那の近ごろ三吉の許る音信のあいばかりか手紙を遣ても返事さへ來  
 ぬので借の己の外に情郎が出來たのだと、あれほどまでに深く言かはして  
 置きながら薄情な奴だと怨んで見ても遠方に居て其の怨言も言ぬので

何様かして東京へ歸りたいと思ふてゐる矢先へ忠七が來てモ、若旦那も  
 大分傷心が直りましたらうから兎も角私の家までお戻りになるが宜しう  
 御さいますると若旦那を連れて芝口なる自分の家へ歸つたゆゑ若旦那の大  
 きに喜び透があつたら飛出して三吉に怨みのたけを言ふと思へど自分を  
 守護て居るもの、目が多いので夫も果たさず、口惜がつて居る所へ母親が  
 内々逢ひに來て。お前の方で詫かかれれば父さんだつて憎いお前で  
 から直に宅へ入れる様にゐるから手紙でも大事をいゆる父さんへ詫言  
 をするが宜いと諭すに若旦那のよんどころ無く詫言の手紙を認めて父親  
 の許へ送り、父親もそれを機會にして宅へ呼返すと、此事を聞た三吉の、駒三  
 と相談のうへ兼て若旦那より取てある夫婦約束の證書を代言人に持して  
 夫婦約束履行の事を掛合し初めるといふのが此の脚色の眼口で、若旦那の  
 方で、只さへ憎い奴とおもふて居る折から又右の掛合され、いよく  
 立腹しても今さら外に仕様もなく、言て強願れるまゝ、金を渡すも残念な



百  
り是のどうしたら宜らうと、思案に暮しが斷然の事に向ふへ忍びこみ、夫婦  
約束の證文を奪ひ此の急場を逃れんものをと、遂に家を抜け出して三吉の  
所へ行くに、おもひの同じ番頭の忠七、先方の掛合を取合ねば其筋へ恐れお  
がらど出るに違ひない、さう成つた時によしや此方が勝にした所が浮評が  
世間へ立て店の暖簾にもかゝはる事ゆゑコリヤ今の家に三吉の家へ忍び  
込んで其の證文を取るが上策と是も三吉の所へ行く趣向にて、此幕へ暗争  
場を出してヤンヤの落を博るつもりぢや、其の暗争場のかういふ体裁です  
るので先づ忠七が三吉の家へ忍びこみ右の夫婦約束の證文を取て出て來  
る所へ三吉の情郎の駒三が出て來て。こよひの仲間の奴等の懇親會から  
ツイ吉原へ連込れたが程よく言て其場を外し、斯うして來るのも三吉に喜  
ばしたサ、此の星の色でい餘ッばと深更た容子、ドリヤ早く行て顔を見やう  
かと舞臺へ掛つて忠七と突當り互ひに是のどマヂくくどあり是より  
二人の暗争あつてナヨイと別れキツとある此所へまた若旦那の民次郎が

百  
出て三人の争闘あること毎例の通あるが、所で此の暗争場に極の註文があ  
るので是までの暗争場の舞臺が明るかつたが、それをツツと改良してマツ  
暗になし本當の暗争を観客へ見せやうといふのだが何とおもしろいので有  
うと鼻うごめかして陳出すに、一同もあるほど感じ、それの至極のおもひ  
付き是非その本當のだんまり場を出す様に仕たいと大賛成で狂言作者へ  
掛合に是も手を拍て趣向の妙あるを賞し、直に準備よかりたるが此度の  
演劇の本當の改良演劇なれば諸新聞紙へも大層な廣告をするが宜からう  
といふので金銀を惜まず立派な廣告を出したるにぞ未だ蓋の明ぬ中より  
府下の評判の大層なものにて。モシ八兵衛さん此度珍富座でする演劇の  
實に見物でせう何だつて本當の鬧圓場をすると言ふンだもの、どうしたッ  
て見よ行なきやア成らねエのサ。さうどもく、鬧争場が本當さばかりか  
二番目狂言に十津川の山くづれ、紀州海嘯で、害をかふむつた土地の容子  
を詳しく見せるといふ事、然して山くづれの幕おのり本當の山を舞臺へ築



造て夫を打ッこわすぞ云ふから俳優も皆な一命がけで藝をするとやら、また其上に驚き入りの築地の海邊から水を舞臺へ引て土間まで波をうたせ和歌山の市中が水よひたされた所をソツソリ見せるとの事は是での貧乏を質に入ても見あいかず成るまいといふ傍より又た一人が。何しろ此度の演藝の大變も道具に違ひがない、きのふも己が新富町の河岸を通ると芝居掛の者が大勢よつてガヤ／＼言てるから俳優の投身でも有のかと行て見ると此度の演劇に用ふ救助船を借りる談判をしてゐるので一休何艘ほどボートが入用のかと聞いて見るとボートばかりでさへ十五艘入るのだと言たが何とゑらしいものでないか、さども取々の噂をしてゐますが皆て右の珍富座での準備も出来、番附も配布、いよ／＼蓋を開る様になりました。が前の様も人氣もゑ初日からお客の山の様で土間など一週間も以前に命ッて置なく取れぬといふので猶さら噂が立たもの、中に詰らない馬鹿／＼しいと吐く人さへ有より如何いふ事かと聞合して見ると成は

看客が小言をいふも無理のない話にて茲にその演劇の体裁を一通り書き立て見むに暗争場の道具の正面に兩國の百本様を見せまた右手に柳橋を半分見せ、渾て三吉宅裏手の体、此所へ忠三がふるへあから出て来て懐中より奪ひし證書を出し、かたじけないと言ぬ計りに押いたゞき行ふとする所へ花道から駒三が出て来て突當り忠三の驚きあから行ふとするを駒三が引とめ立廻り宜しく有て双方へ別れキツと見えを爲る此所へ若旦那の民次郎が出て三人だんまりに成るので是が明るかつたら俳優のこあしや道具の疑たのが見える様あれど何分本當に舞臺を暗くして仕まつたので俳優が何をしてゐるのやらサツパリ分らず夫ゆゑ見物の互ひに。モシ今何をしてゐるんでせう。さやうサどうも眞暗で分りませんが柵を拍た所を見ると何でも双方へ別れてキツとあつたんでせう。あるほど左様でせう、そして向ふの方にサヨッヒリ見える燈火の何でせう。あれがサ疑た所で川向ふの燈火がわづかに見えてゐるんでせう。あるほど／＼聞て見れ



分るが何分外が皆赤黒だから道具も丸つきり分りません手まかし私  
 かの此の暗争場を寝る事が出来ません何故かれば所が柳橋近傍ぢや  
 有ませんか而て見れば街燈があるはず、また在ながら點火のから猶さ  
 ら不審街燈の月夜を除くの外必ず每晚點火のもので、それ暗夜だから點火  
 てあつたのだに消たといへば夫までの事だが、何にしる東京中での藝妓の  
 本場所ある柳橋だに、此様に真暗を夜があらう筈が、是の實に理に適は  
 ない事だと咄やくも亦た道理なれ、然れば蓋の開く前までの評判の立たる  
 珍富座もパツマリ客評が亦くあり、それと共に市川頑藏の人氣も地に落ち  
 たりとぞ、  
 これを見ても演劇の何方までも演技でやつて除るのが客評を博る基で餘  
 り改良々々と極端へ走つて仕まふと右様の次第にありますからト、ナト  
 まじめの附言、併し本編の題號が紙屑籠といふゆゑ此件の漢籍の切っ端と  
 ても見たまへかし

下手うつて低くなりたる鼻道や

馬鹿な舞臺を踏だ俳優等





可笑さよ介添人も頭を  
おとし話と家の決笑状

明治何年の何月何日ころの事にやあらむ人の噂も橋亭とて彼の兩國橋町の寄席にて落語家の大集會ありけり、高坐へ顔を並べる落語家の數が二十五人、もつとも木戸の平常より一錢の直あげ、それでも出る人數に割當ると餘ッばどお客の利徳で、頭一つに附き二厘といふ大安賣、それゆゑ毎晩く聽衆の山の様に押かけ、ドツと一同がわらふ時の鎖道馬車の馬が驚くほど近邊へ聲がひいき渡り、是を大層に言へば山岳の崩るゝかと思ふ計り實に近來さき大入りしが、今夜の土曜日といふので取わけの大入り、やがて三遊亭變相といへるがズーツと高坐へ上り例の通り一揖して茶を呑つゝ聽衆を眼下に瞰渡し。エーお話をまをすもの何れも古い所ばかりで、それを我々が洗濯いたして皆さまへお聞せまをすのですが、其の洗濯にまた妙手下手がありまして妙手お者が洗濯をいたすと奇麗におちますが我々の洗

濯の安直の石鹼でゴリ／＼やるで話に垢があつてよろしく有ません、併し其所の御ひいき振でお聞きのほどを願ひます、もつとも演説などを聞きにお出にある方の自分の氣に適た演説だとヒヤ／＼と仰やるか手をお拍ささるるか、どツちに致しても肩の張る事ですが其所をおもふと寄席へか出にある方のお氣樂です、面白いとお思ひなされるとアハ／＼／＼とお笑ひにあれば夫で済む事で、只今辨すお話も面白いとお思ひ下さればお手を拍いて載く事に入しませんから何卒御一同にお笑ひなまつて下さる様に願ひます、是の極く古いお話で、大星由良之助が祇園の一方樓で遊んでゐるころ兎かく買馴染のお輕が自分をきらうので如何もふしぎだと或る時九太夫が來たので、トキに九太夫どの異な事を伺ひまをす様ですが如此お事があるので實に拙者も不思議に存するが、アノお輕坊が如何ある事よりか拙者をきらひ、ついで機嫌のいゝ顔を見せて呉た事がござらぬゆゑ眞に氣が揉るでござるが是の如何に致せばよろしうござらぬ拙者もホト／＼困



りをるで、何かよいお考へもござるまいか。これのまた近ごろ異な事をうけたまはるもので、拙者も御承知のとほり實に不粹もので、斯やうな事にトシと宜い智恵が出ぬでござる、併し悴の定九郎奴の那の通の放蕩ものゆゑ相談もいたさば宜き考へも出るでござらうから今日立歸ると早々尋ねたらうへ尊君の許へお知らせをすでござらう。まからば如何か左様に願ひたい、そのかはりお輕を首尾よく手中へ丸めて仕まふた曉に殿から戴いた家藏の九寸五分を貴殿へね譲りまをさう。それの千萬忝けあい然らば是より直に立かへつて定九郎に尋ねるで御さらうと、九太夫の立歸りましたが此所へ出て來たの例のお輕で。由良さんおまへの何をして居さんす、ナト奥へ行って又たいつもの目かくしでも仕やさんせエナア。イヤその目かくしや鬼ごっこを爲るにも好たそなたがピンシヤンとしてゐての面白うあい。由良さんとした事のまた其様を嫌忌を言はんすわいなア。又たいやみを陳ふと云ふけれどナト我の身にもなツてくれるが宜い、これ

ほかに思ふて一里半もある山科から毎日の様に通ふて來るに和女のいつとても笑顔を見せて呉れた事がある、餘りつれあいに程があるでないか、ヨ、これナト柔しくして呉れても宜いでないか。アレよしやさんせエナア、ア、嫌らしい。それ見たか我が少し手でもおさへると和女の直に其様に怒るでないか。ハ、ア、お前のいやらしい事はッかし以前の主家の家老さんでも今日とあつての只のね客いやぢやと思ふ人へ無理に靡く様を事の仕さいわいなア、トそのま、ピンシヤンとして奥へ入つて仕まつたので由良どのの大落膽、そこへ以前の九太夫が出て來て。大星氏に又た其所にお越でござつたか只今身共が旅宿へ歸らうとする道で蛇の目の破れ傘をさして來か、りさま拙者へ突當るものが有るので、不禮もの奴と、よく見ると悴の定九郎奴で、イヤいつでもボロを衣て困つたもの、ついでに貴殿がお頼みの一條をたづねたるところ悴のまをすに、これが外の方から又た致しやうも有らふが由良之助どのの仕方があいとまをすで、それのま



た如何いふ譯を尋ねて見ると、ナア、ルほど悴のまをす通り、拙者も感心をいたして御さる。ム、うれり又たいかいの次第で。されハ貴殿のれ名前が「大石」だから女にのりてない筈だとまをしました、と一席の落語を陳て變相の高座を下る跡へニコニコと去るが上つたのは是も三遊亭派の落語家で變久といふ愛嬌もの扇をバチつかせて話し出すやう。おなじ山良之助のお話がつよく様ですが私の大分筋がかはつて居ります、近ごろの大變日和といきで雷さんもたいくつで成ませんからナト下界を見物して歩かうと雲務省へ暫時の休暇を願ひ、少しの黒雲を拜借して先づ東京の方の上から見はじめましたがいヤ東京の繁昌の格別あるもので中にも隣焼といふ菓子賣る店を見て、雷どのも其まゝに通り兼てゴロ／＼と轉がり落かけたが隣家が線香を賣る藝妓屋だつたから足が止り、これより市中を見あるいたうへ品川の空へ来て見ると下に面白さうに瀛車がガラ／＼ガラと走つて行ので、一番此逸と駈つくらをして見やうと、乗てゐる雲を一

揺ゆすぶつて、サア駈け出したとも／＼鳥もつがず瀛車と一所駈け出し、丁度翌日の正午まへ瀛車が止つたとおもふと、いつの間にもやら西京まで来て仕まつたので来たこそ幸ひ兼て聞てゐた祇園の一方樓で一晩あそんで見やうと先づ東山ある將軍塚の一本松の梢へ雲をつなぎ、夫より自分下て一方樓へ参ると仲居等の喫驚して取次に出るものもあく何れもヒッヒッしてゐるので詮事おしに主人が出て、どういふ御用かと聞て見ると。一晩あそびして貰ひたい決してゴロ／＼と騒ぎ廻らぬからとの頼みに、それでの折角のお出ゆるお遊ばしませます、が、お約束どほりゴロ／＼とお騒ぎあさらぬ様にお願ひをします、コレ／＼此方を御案内いたすがよい、そして雲の上にお居つけ爲つた方だから二階の方が宜であらうからと二階へ案内させたので雷どの大喜び、藝妓を多勢よび上げて飲よ謠への陽氣さなげ初めの中、主人へ約束をした事ゆる成たけ謹慎でゐましたが酒が廻るにつれて雷どののゴロ／＼とやり出したので主人のびっくらして



飛で来て。モン／＼それでいお約束が違ひますから、どうかお静に願ひた  
 いとの頼みにヤツと氣が付き、ゴロ／＼やりたいのを堪へてゐると此度の  
 下座敷の客が大層さわぎ出して、その騒ぐ毎に二階がユ／＼と動い  
 て徳利がたふれるやら障子がはづれるやら實にすさまじい事ですから雷  
 どのも喫驚して。一体下の客は何者ぞと聞て見るとあの方のいつも下界  
 から遊びに登つてお來になる地震さんですといふので、これの面白いお客  
 が来るものだ一体地震といふ奴のどういふ顔をしてゐるか見たいものだ  
 と段梯子を二足三足下下て覗かうとすると、下座敷にゐた地震も雷といふ奴  
 のそんな奴か見たいと段梯子を登りかけて互に顔を見合せ、地震の方が。  
 そちや落やるかといふと雷が上へからお前のゆらさんか、と落して樂屋へ  
 引込たりしが後の變久の方の落語が面白かつたので先の變相の落語の客  
 の土産ばなしにあらす是を相撲に比較て見ると物の見事に土俵の外へ投  
 られたので、變相のいかに口惜／＼とあらず、どうかして此の仇をうちた

いと思ひ或る人にあつて相談をする。夫かれバ斯するが宜い、決笑状と  
 いふものを變久の所へ送り、互ひに介添人を頼んで何方群集の場所を撰み  
 其所へ行つて双方面白可笑い話をして何方でも相手を笑はせたものが  
 勝とするが宜との勤めに變相もあるほどと思ひ。さらばさういふ事に  
 たさんが就て、其の決笑状といふもの如何を体裁に考たくめて宜しか  
 らう、どうか乗あつた船とおもひ一筆認めて下されぬかとの頼みに。そ  
 れの雜作もさい事だ斯う書けば宜のだ序に先へ送れる様に已が書て上や  
 うと書て與へた左の決笑状あり

決笑状

このほと橘亭へ出席の折り拙者が由良之助の  
 落語を演たる後席へ登り亦た由良之助の  
 了落語を演し、其の筋こそ少く異りたれ青樓が



「力あるばかりかゆらさんかと言ひおちやるか」と陳べられたるの我々前席の落語を傷つけむとするものにて實は憎むべきの事あり、それゆゑ来る土曜日の午後一時より兩國廣小路の大道にて貴殿と決笑をいたし度、御承諾の上、介添人同道同日同刻より豫定の場所へ御出向有之度此段申入候也

明治廿二年十月廿日

本人  
三遊亭變相印  
介添人  
南都妙太郎印

三遊亭變久殿

右の如く認めたる決笑狀を送りたるに變久もあまりに事の意外あるに驚きたれど敵に挑れながら後を見せるの残念ありとて、早々承諾の由を申し

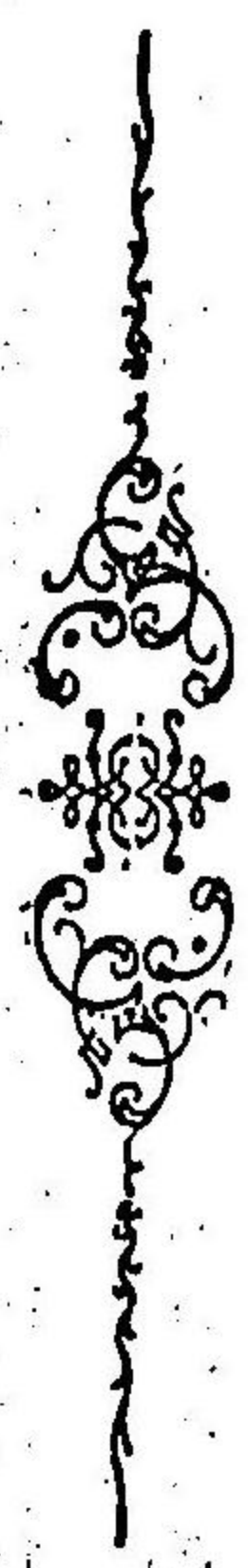
遣はし、その夜よりの寄席へ出る事を断りて只管相手を笑はせる工夫を考へ、いろ／＼心を苦しめたるが、思ひの同じ此方の變相も、どうかして奴を噴飯させてやらうと手をくんだり煙草を吸たり種々雑多と考へるうち早くも約せし日の來りければ定めぬ場所ある兩國の廣小路へ至るに相手の變久の殊勝にも介添人と共に來りて己の難るを待ちゐるたれば一揖まつ差むかひ去來と計りに身がまへたり、此事はやくも府下の各新聞紙へ出たれば決笑との奈何ある事を爲すものによ、笑はして相手を殺すものか但し願の掛鉤を外させるものか、何しる行て一見せばやと押出した見物のさしにも廣き廣小路も爲め往來の出來ぬばかりにて二人の身がまへつゝ介添人の指揮を待つに双方の介添人の相談の上先づ變久の方より饒舌出させしに變久も負ていと一生懸命にあり、いろ／＼と饒舌り出だしたれど變相の慈ぞどツツと堪へ中々わらふ容子も見せず、それゆゑ變久のナト落膽しきながら猶も鼻を曲げ口を尖がらかして話しをさせどツツともツツと



も云はねば變久も今の後をいふべき勢ひも脱て口をつぐみたるに、變相の  
ヤレられしやと喜びあがら。わたし近ごろ異風奇事を考へ出しまして  
世界にあるとあらゆる面白い顔を真似て見る事に仕ました。が先づはいか  
り處へ入って力む顔をして見せませうと言つゝ両手を組で妙き顔を仕出  
たので双方の介添人がおもはずドツと噴き出したれど肝腎の變久の無理  
にをかしさを堪へて未だ笑はず、然れば變相も是でのあらぬと此度の盲人  
が鼻息で燭臺の燈を消す真似をえたるに丁得の變久も今の辛抱があらす  
してブツとふき出したるゆゑ遂に變相の勝とあり名譽を回復して喜びし  
となん

落語家の決笑だけで見物の

笑ひもドツと落が附たり



是より後の少し長い文章ゆゑ特に女郎の多と題し回を分ちて記す事と  
あしぬ、何故とあれ前に記したる如き文体にて讀たまふ人達が倦た  
まはむ事を恐れてあり、看客、著者が編輯す程に盡しかと怪しみたまふ勿  
れ、屑籠に書入るべき趣向の猶は殘して澤山あり、夫の巻端にて陳べおさ  
たれと念のため重ねて茲も一言を附しぬ

○女郎の怨

◎第壹筆

花の咲出し麴町區有樂町とて住所の町名も身の樂を表したる左次兵衛と  
いふ氣樂者あり此の左次兵衛といへるの彼の花暦八笑人といふ戯編にて  
名を知られたる滑稽家の生存りにて今の三人の男子まで擧げ最とゆたか  
に暮し居れるが就ては長男の左之助も早や年ごろにあり居る事ゆゑ何か  
商ひを初めさせたいと思へど何分當節柄の事あれば是といふ甘い營業  
の考へもあく夫れがため困つてゐる折から神田八丁堀の朽面彌次郎兵衛



(苗字と呼ぶ様にあつてから屋の字を取たりと見えたり)が遊びに来たの話  
 しに。或る所にて喧嘩預り屋の株をソツクリ賣たいといふ人があるが彼  
 をお買になつてはいけませんか、喧嘩預り屋といふもの、實に類があくッ  
 て好い營業です、原より名稱ばかり聞てゐると何様事をするのかと思  
 ひでせうけれど是の雜作もない事で先づ何方でいも喧嘩があるといふ事  
 を聞くと直に人を遣て、その喧嘩を預らせるのです、どういふ方法で喧嘩を  
 あづかるかといふと、喧嘩の種類よつて直を立るので、朋輩喧嘩や、大道の  
 喧嘩の金を餘計に出して預る事が出来ません、何故とあらば斯いふ喧嘩の  
 お流れにある事が多いです、それに反對夫婦喧嘩などの何程高く出して預  
 っても宜しいといふ譯の、夫婦喧嘩に限つて直に間が直つて受出しに来ま  
 す、また最も利分に廻るの、博徒の喧嘩ですが、其の替り博徒の喧嘩を預る  
 の、餘ッばど目が利かいと行ません、どういふ次第でかといふと博徒の喧  
 嘩に二様ありまして、一は極く間の悪い親分同士の喧嘩で、是の預けるか

と思ふと出しに来、出しに来るかと思ふと又た預けに来るから其度に利分  
 が取ますが、見分の喧嘩の仕方がありませぬ、一つ違ふと命の取遣り、一方が  
 死で仕まへば夫でまづお流れといふ体裁、それです、あら利に廻つても博徒  
 の喧嘩の目の利くまでの預かる事が出来ません、其所を能く考へて遣れば  
 中々甘い營業ですが、お宅も斯うして多勢御子息のある事ゆゑ何誰かに彼  
 をお爲せなさつての奈何です、實に話さへすれば手の出し人の何程もあ  
 り升が、先だつて貴郎が何か甘い老株の賣物でもあいかどのお話してした  
 から、伺つて見るのですが、御同前に馬鹿な遊びをしてゐた時分と違ひ、昨今  
 での何事も面倒になつて新奇にした營業で、中々甘い儲けもありませぬ  
 から、斯ういふ株を買て何誰にでもお當がひなすつたら宜かと思ひます、ト  
 信切又言ってくれるより左次兵衛も大きに喜び。よくお知らせあそつて下  
 さつた實の先づつて貴郎へもお頼みまをしたほどで、長男の、左之助へ  
 何か宜い商法をさし度と思ひ、いろ／＼と考へて見ても是とした宜い商法



が赤いので實の困ッて居る所でござつたが、それの宜い事を聞して下さつた。どうか面白かりさうな商法、兎もかく息子にさせて見たく思ひますから恐れ入りましたがお骨折序に何程で老株を賣るか、どうか聞合して見て下さりませぬか。それのお易い事、直にも聞合して見ませう、然していよ、是をお初めになると及ばずながらも私がお指揮をして、損のまゐらぬ様にいたさせませう。さうあれば此上おしの好都合お暇のある節、來て是非おさし圖を願ひたい。それで、是から先方へ參ッて何程で手が拍るか當つて見ませう。どうも御足勞のやど恐れ入りますねへ。イヤこれッくらゐの事、何でも赤いこと、晩方にでも參ッてお返事を仕ませうと年の老てもまめくしく挨拶あして歸りゆく

◎ 第二筆

其日も暮れて七時頃、彌治郎兵衛のいそぐと入來り。實のモツと早く參らうと思ひましたが、先方のものが不在で漸く今がた歸ッて參りましたから、斯うくだと話しを致して見ると。さういふ口があるから直にも賣たいゆゑ如何か能く話して見て、お呉ぬかどの事、一体何程で手放すかと聞て見ましたら今日まで預ッてある喧嘩も其まゝ引渡すとして何か三百圓呉れとの被題。それの餘り高いから今少々安くするが宜い、直さへ安くバ私は何様にでもして先方へ買せる様にするからといふと。それでお思ひ斷て五十圓も安く仕様とまで成ましたゆゑ、夫で宜しくバ先方へ御同道いたし預ッてある喧嘩の模様おどを一見すると仕ませう、二百五十圓からバ決して高くのありませんから。貴郎が仲へ入ッてゐて下さるので、すものを大丈夫です、二百五十圓出して買とると仕ませう。それで、明日先方



へ御同行いたして預り品を能く調べて見ませう、いづれ明日の當方へお誘ひよ参りますからと當夜の別れて歸り行きしが借て翌日の兩人同道にて先方へ行き、預り品を調べに掛りしが先方の主人の念のため品物を御覽よ入ますと一個の包を解とサア大變是の夫婦喧嘩と見え女房の聲で、

「そんな毎晩く花魁の顔が見たさやア、其所の内證へ頼んで仲どんに仕て貰ふが宜いや、お前の様お男に誰が惚る奴があるものか、女房の私だつて愛相が尽てるもの、花魁がはれる筈があるものか、仲どんにでもあつて毎日側で見てる居りやア情郎のあるのも分つて其の延た鼻下が少たア縮まるだらう

亭主の聲のまた餘ほど大きくして

「己が毎晩家を明るのが悪いから前刻からいゝ削減にわしらつて居りやア宜氣にあつて飛だ口を利き出しやアがる

「お前の方に言れる様お事が仕てあるから其様いふのだ、私のいふ事が無

理だと思ふなら差配さんへでも行つて聞てくるが宜い馬鹿らしい

「ナニ馬鹿らしいだ、コソ畜生奴能くそんな事を吐しやアがる、是でも喰つておきやアがれ

「キアツ……人ごろしく

エーモ一澤山く、此上打捨ておくと何やを騒々しくなるか知れぬ、併しどうも面白いものだ。この喧嘩の充分言合おい中に人が来て預けたものと見ぬる、是での品物も澤山あつて中々よろしいでせう。充分氣に適ましたから此場で直に手を拍て仕まひませう、金の約束どほり二百五十圓持て來ましたからト懐中より出して前に置けば、彌次の之を仲次して先方の主人へ渡し直に取引を済して是より酒となりたり、斯て先方の主人の二三日程て他所へ轉住り後の長男の左之助が引受ていよく盛大に營業をし初めたるが。彼方の家での代が替つたから一番喧嘩をして錢を借り倒して遣らうでぬかいか夫にしても彼方の門前で遣るが宜からうとて、毎日く



此家の門前に喧嘩の絶る間がなく、是でい迎も資本が續かから當分夫婦喧嘩の外に貸出さぬ様に仕やうと門頭へ大きな紙札を下るまでになりしゆゑ駄物喧嘩の預け口の少なくなつたが今まで既に金を貸出した分の奈何にとも仕方がなく、それゆゑ期限を縮めて出し方を急いでも原よりこしらへ喧嘩なれば誰あつて出しに来るものなく、ホト／＼困り果しが此上の廣く口を探して見切り賣に仕様と新聞紙へ廣告を出したるに其の効能たちまち有て西京よりわざ／＼人を登らせて喧嘩を求めに来たるより、西京あたりから喧嘩を買に来て一体どうするのだらうと聞て見ると、西京の喧嘩の勢ひがのろくつて良きいから東京の喧嘩を買て歸つて見本にするとの話しゆゑ成ほど是の面白いおもひ附だ了得の西京の人だけ妙所へ考へを及たと一同感歎なしたりける

◎ 第三筆

さても西京から登つて来た人の左之助方にて喧嘩の流れものを多く買取りたるうへ嚴重に荷造りして通運會社へ出したるが此の事に就て亦た不意の騒ぎこそ起り來れり、夫の如何ある事件かと云ふに通運會社の人夫等の眞可、喧嘩を包みし荷物と知らねば只だ通常の荷物と心得、棚の遠磨さんならねど下しても見たり轉ばしても見たりする中に縛りし繩が段々どゆるみ、それも外の荷物なら其様はやくの繩もゆるむまいに、根が喧嘩を無理に押へて包み込だものおれバ中で喧嘩と喧嘩とが肩摩又た更よ一場の喧嘩がオツ初まり、これが爲め繩が次第にゆるみしものにて丁度人夫が大津の出張所へ車を着けて一先づ荷を下さんとする折から繩のフツリと音して切れるや否や中から飛出した多くの喧嘩

「ヤイ手前ハママ母親に對つて何といふ事を言アがるンだ散々バラ放蕩



をして置きやアがつて未だ其様事を……

「何か言出すと母親だ〜と計り言ふが、親てエ事ハ原より知ッてらア、親  
から何故親らしく仕て居あいのだ母親らしく仕ねエ親から他人も同前  
だ、母親なら親の様にチヤンとお前が仕てエるンから己だつておとあし  
く爲らア己の放蕩を咎める暇で自分の大酒を止が宜い  
「己の親に對つて未だ其様事を言アがるか  
「ママ〜と遣り出した此方にも又た雙者の喧嘩  
「手前から突當ツときやアがつて詫も仕やアがらあいで  
「だのら悪かつたと言てるぢやアねエ  
「未だ其様事を言てやアがるか  
「悪かつたヨ己が  
「悪かつたど吐しやア死しても遣うに  
ト半間な喧嘩を遣てる隣ハ藝妓の幸吉と花次の喧嘩、丁度米八と仇吉

もどきで  
「コレハ花チヤン、イエサ花次さん、どうでお前も妾の情郎を奪るッ位の度  
腹があるンだから、直たアウンといふまいだらうたア此方も承知をして  
るンだが、ノ杉浦さんと妾の交情ハ並一通りぢやア有やア仕あ、お前  
ハそれを知ッてる計りか此間まで妾の宅の厄介にあつて居た身ぢやア  
あいか、義理と人情を思やア出来た事て有やア仕ない、ダガ今となつて夫  
を言たッて仕様があ、今までの事ア妾の方で寛大に見ておくから  
今日かぎり杉浦さんの事ア思ひ断たとお言ひ  
「あるほど世話になつた時やア世話になつた時、今日でハ一本立の花次サ、  
ウンと言はふと言ふまいと妾の勝手さ、それやど大事の杉浦さんから保  
險會社へでも頼んで保険を附ておくが宜い、餘り如何だの如此だのど大  
きき聲でいふと自分の恥を洒そ様もンだヨ  
「悪かつたとも言あ、止に其様事を思知らず女



「コリヤまた變な事をお言だね、恩知らずたア誰の事だ、世話にあつた事を  
知ッてりやアこそお前が此間入用ツたから自分の者まで出て金をこせ  
エて上たでのさいか其の約束の期限が過でもウンともスツとも言さい  
あアお前の方が反つて恩知らずだ、

ト大立廻りにあらうとする此方にのみまた書生の喧嘩

「早川貴郎の失敬を奴ぢや、僕に遊興金を立替させておきよッて、お負に僕  
が他出した間に洋書を質屋へ持て行て、これも下宿料が足なくッて之を  
入さいと下宿屋にも居れないといふ様も必要があッて遣ツたンから宜  
が、拵へた金の湯嶋へ持て行きよッて無駄遣にしてしまつたと言ふぢや  
ないか、其様な腐敗した心を持ちよるから朋友の交際が永續せんワ、君が  
必要な事に遣ツた金なら待てやるが其様馬鹿をして消費よツた金ぶか  
ら一日も待れン、僕の勉強するため書籍の持ちよるが君の放蕩費に充  
てる様は持ちよる書籍の一冊もあいつ、早く返せ、それとも實の出来心で仕

たんで濟あかつたからと詫を陳れば又た仕様もあるが他人の物品を遣  
ツておきながら、急にそんな事を言たツて金が出来ンとい何ナニ事た  
不都合極まるぢやアさいの

「大きな聲で馬鹿な事を云ふナ下室で皆が聞とるワ、君だツて餘まり大言  
を吐くナ日外上野へ行ヨツた時、蓮玉へ寄たアノ勘定のどう仕よるンヂ  
ヤ、未だ十二銀二厘五毛がその儘にあツちよるセ、ナニ彼の些少ぢやと、わ  
づかでも澤山でも道理の一途ぢや君の法學を修めちよるに似合ぬ事を  
言よるナ、假令金銭の些少でも兇器さへ持て入りやア強盗でのさいか  
「おれの尋常對借といふのだ、應對づくで借たものだ君の窃盜の範圍内  
に入る舉動だから宜しくさいワ

ト是も半ハタ／＼の下喧嘩で彼方にも喧嘩、此方にも喧嘩とガヤ／＼ハタ  
ハタ非常な喧嘩されバ人夫等の大きに驚き彼方を制し此方をあだめ、やう  
やく如舊に包の中へ入たるが、さて斯いふ荷物での途中にて再びオツ初ま



らむとも言へぬ別々に購送すること宜けれと掛りのもの等が一層注意を  
おしぬ

◎ 第四筆

借是より別に多くの人夫を雇ひて車につけ無事に西京ある受取人の許へ  
送りといけたるが、買方の宅で夫と見るより待ち居たる折かれバ一同飛  
で出て荷物を庭へ積入れ、翌日より東京喧嘩賣捌所の榜示を門頭へ出し  
客の来るを待ちあゝる所へ入ッて来たの淀の方の村の若いものにて會釋  
ながら。此度東京の方から喧嘩を取寄てお賣捌にあるのにお宅でそかな。  
ハイ手前で御坐いますが、貴下の喧嘩がお入用でございませうか。ナニ入用  
といふは邊澤山入用で有ませんが、一組か二組賣つて観きたいデ。ヘイ  
ヘイ一組でも二組でも、どうかお買取を願ひます、そして喧嘩のどういふ体  
がお入用でございませうか。左様サあまり強くかいのが宜しうござい升、實  
の村のお祭りに、是まで随分喧嘩があつたので本年の村役の衆からやか  
ましく言て喧嘩をさせぬ様に仕たので村の者等のツダ／＼してゐますが、



迎も斯うやかましくつての本當の喧嘩の出来から賣て東京から買て  
 来て賣捌いてゐるアノ喧嘩でも買て來やうかとの相談が出来私がかうし  
 て參つたんですが、あまり直の高くない中所の喧嘩を二つばかり賣て貰ひ  
 ませう。それで此邊のどうで御さいませう双方も職人で、ツイ一盃元氣  
 の上で初めた喧嘩をどい根がぬ祭りですから此様のが反て宜だらうと思  
 ひます。あるはど其邊が宜しいでせう、それで夫を一組と今一組何か外  
 の物をお見せ下さい。へい承りましたこれも矢はりツイ一の喧嘩で突  
 當つたノ當らんノといふ一寸とした所で、お氣に召ましたら極くお安くし  
 て置ませう、エーコウと、二組で十圓にいたして置ませう。それで夫  
 を貰ふと仕ませう、どうか途中で出ない様に能く縛つて下され、左様から十  
 圓さし上ます。ハイ有がたう存じます、どの挨拶を後に聞て若者の當店を  
 出で淀へさして歸りしが待兼たる村の者等、どうだ喧嘩の有たか、どうい  
 ふナノを買て來たと尋ねるを制し。マア早く言て仕まつての面白くない

から皆々に喧嘩の筋を聞さないで爲ると仕様と、是より早く喧嘩をさせる  
 場所おとを取極めたるうへ、若しや喧嘩が強くなつたら引分けかけりやア  
 成かいから其の都合も仕おければならいと村で腕力家と云はれた若者  
 を十人許撰んで喧嘩の保護人となし、偕て翌日の二時、すなはち人の出盛る  
 頃を計つて喧嘩の包を場所へ運び、ツリヤと掛聲仕ながら包を解くや否や  
 ワツと叫び出したるの女の聲ゆゑ、力み返つて見てゐる者等、如何も不審  
 と思つてゐると其の女の聲、いよく高くありて

「サア殺すから殺せ、早く殺せ」と身体を突附る者の如く

「コナ」何を言アがるんだ、畜生奴、あんまり詰らねエ事を言アがるから

懲戒ンでエ

オイ、善チヤン是やアか前夫婦喧嘩らしいぢやないか馬鹿くし。それでも往來で突當つたからの喧嘩だと言たから買て來たんだ、夫でい番頭奴が間違つて包んだのに違ひない。何しろ此様も喧嘩の面白くないか



ら早く今一つの方と取替ねエ。アノ番頭奴ひとい物を來しやアがつたト  
吐きあがら今一つの方を出すと是ハ夫婦喧嘩と違つて大分面白い根が一  
ぱいやつた上の喧嘩だから

「手前ハ交情の作法を知らねエ奴だから、知らねエ奴だといふのだ、作法を  
知ッてる奴あら其様なべら捧お事アしやア爲ねエ

「猪口の献酬に作法もヘチマも入るもの、腹が立ち勝手に怒ッてるヨ  
宜い馬鹿の面の皮だ

「ウメ何を吐しやアがる、どうするか見ろ

オイ、善チヤン成はど喧嘩ハ随分おもしろいが言草が氣に入らねエぢ  
やないか、猪口の献酬から起つたゴッ、から飲合てる座敷中の事だ、大道  
で猪口の喧嘩も餘り感心仕ないぢやないか、この喧嘩も早く引込て仕まへ  
ぱい、と再び小言を頂戴したより喧嘩を買て來た善吉といふ男ハ困り切  
り詰り喧嘩ハ二組とも若者等の氣をさぐさめるに足あかつたので、詮事も

しに善吉ハ残つた喧嘩を包みて先方へ戻しに行たれど餘程消滅てままつ  
た事もある、ソツソリ受取る譯にゆゑ、併し夫婦喧嘩を間違つて差上げたの  
ハ當方の失策ゆゑ、此方の三分の一直を引て如舊に仕ませうトの事に善吉  
も仕方なく後の自分が内損をした様な体裁にあつたが、話頭ハ一轉て東京  
ある左之助宅で一時夫婦喧嘩の外ハ預りまをさすどまでに貼札をえた  
れど追々舊の通り喧嘩の種類を撰まず預る様になつたから以前増して  
繁昌おし、隣りに多くの利益さへ得たれば當主の左之助ハ素より親の左  
次兵衛ハ眞に宜い老株を譲つて貰つたと大きに喜び居たるが主人の左之  
助ハ近ごろ店の忙がしさに他出もせぬほどに成しに今日少し店が閑暇  
ゆゑ、久しぶりで友人の許へ遊びに行ふと思つたる折から、御免なさいと暖  
簾を潜つて入つて來たハ都屋といふ藝妓屋の婆さんで、どうか御面倒で  
すが先達て預つていたいた花次と幸吉の喧嘩を出して下さいナ。ハイ  
よろしう御さいます直に出しませう、そしてアノ喧嘩ハ何日お預り申した



のでございしましたか。たしか此の十日の日だと思つて居ります。それで、チヨイとお待下さいと藏へ入つて捜せど見れど藝妓の喧嘩と附箋たる喧嘩の見えねば是ハト胸まづ轟せり

◎ 第五筆

左之助の都屋の婆さんを店に待せて藏へ入り探して見れど其の品の知れぬよりは如何せし事あるかと小僧をも呼て猶ほ調べて見れどいよく品物のおきに當惑なし、若しや此間西京へ賣た喧嘩の中にアノ品が雜つて居まいかと心附しゆる直に帳面を調べて見ると奈何にも賣渡した品の番號の中に藝妓の喧嘩又記して置た番號の品が入つて居るので大に驚きしが此事を有の儘に話したからアノ婆さんが歸る様もなし、ト言てまた外に吩咐の仕様もあく、是ハ困つた事になつたと藏の二階へ上つたり下たりして心配すれど、如何にも斯にも仕様がないので父親の左次兵衛へ斯々だと言て迎ひに遣ると左次兵衛の直に飛で来て使の婆さんに對ひ。實ハどうも申分のさい事ですが昨夜盜賊が入りまして大分品物を盗まれましたが其中にお預りの品も入つて居つたと見えまして、トンと見えませんが猶



は能く調べまして後ほど當方よりお返事を致しますゆゑ暫時御猶豫を願ひまするといふと使の婆さんの眉をひそめて。それでい何で御ざいますか妾の方よりお預けまをした品が見えなくなつたとお言でござい升か見えなくあつたで困るぢやアありませんか、實に今宵和睦をさせ様とおもつてアノ喧嘩を出しに參つたのですに、本當に困ります、全体此の喧嘩といふの妾が口を利て此方へ預つて頂いたのですから今見はなくなつたと言へば妾が何様にうらまれるの知れませんが、其様を事を言ひいで何の能く探して見て下さいト中々歸るべき容子もあきより了得の左次兵衛も當惑あり。兎も角明日までお待下さる様に、明日にあつて見はかい様でしたら屹度相當の金を出してお償ひまをしますから。お償ひ申しますト言て下すつた所が根が喧嘩の事だから金銭で償ふ譯の行ますまい。行かぬ時にい行かぬ様に又た何様にでも致しませうから今夜一夜の所をどうか宜しくお願ひまをします。それはどお願ひをさるから本宵の所い妾

から程よく言て和解を延して置升から明日は是非何とか話しの分る様に仕ておいて下さいヨと念を入れて歸つて行た後に親子が頼を集めて、是の飛だ事になつて来たど、心配の中に日を暮して當夜も思案に深して寐たるが借て其夜も明て翌朝とありしに未だ親子とも好き考案も出ねバ今にもアノ婆さんが来たら何と言て遣らうかと胸をドキ附せてゐるに引替て、どうした事か婆さんがやつて来ぬので是に此方へ来ない中に早や其筋へ恐れながら遣つたものか、それにしても召喚も来すと不審におもつてゐるうち正午になり晩にあり夜も十二時まで待てゐたが婆さんの来さうにも無し、ハテ是に如何した事であらう妙事にあつたものだと思ひつゝ翌日も一日また暮して仕まつたので出しに來ないこそ幸ひ西京へ電信で藝妓の喧嘩だけを戻して呉れる様にと言てやりしに先方より委細郵便と詞りの返事あれば其の郵便の來るのを待てゐる折から先方より出した郵便が届きたるゆゑ讀下して見ると、アノ藝妓の喧嘩は天津で荷物が解た時中



百四十  
から出て喧嘩を大方爲て仕まつたから西京へ着た時分のホンの形ばかり  
残ッてゐたので残り川へ流して仕まつたとの文面あれ成ほど川へ流  
して仕まつたものから取に來ぬのも道理だと初めて茲に愁眉を開きしと  
なん是の二三年前以前の事にて今も此の喧嘩預り所の存在や奈何に夫の  
記者も知らざりけり

滑稽反古探 終

明治廿四年九月廿五日印刷  
同年同月廿六日出版

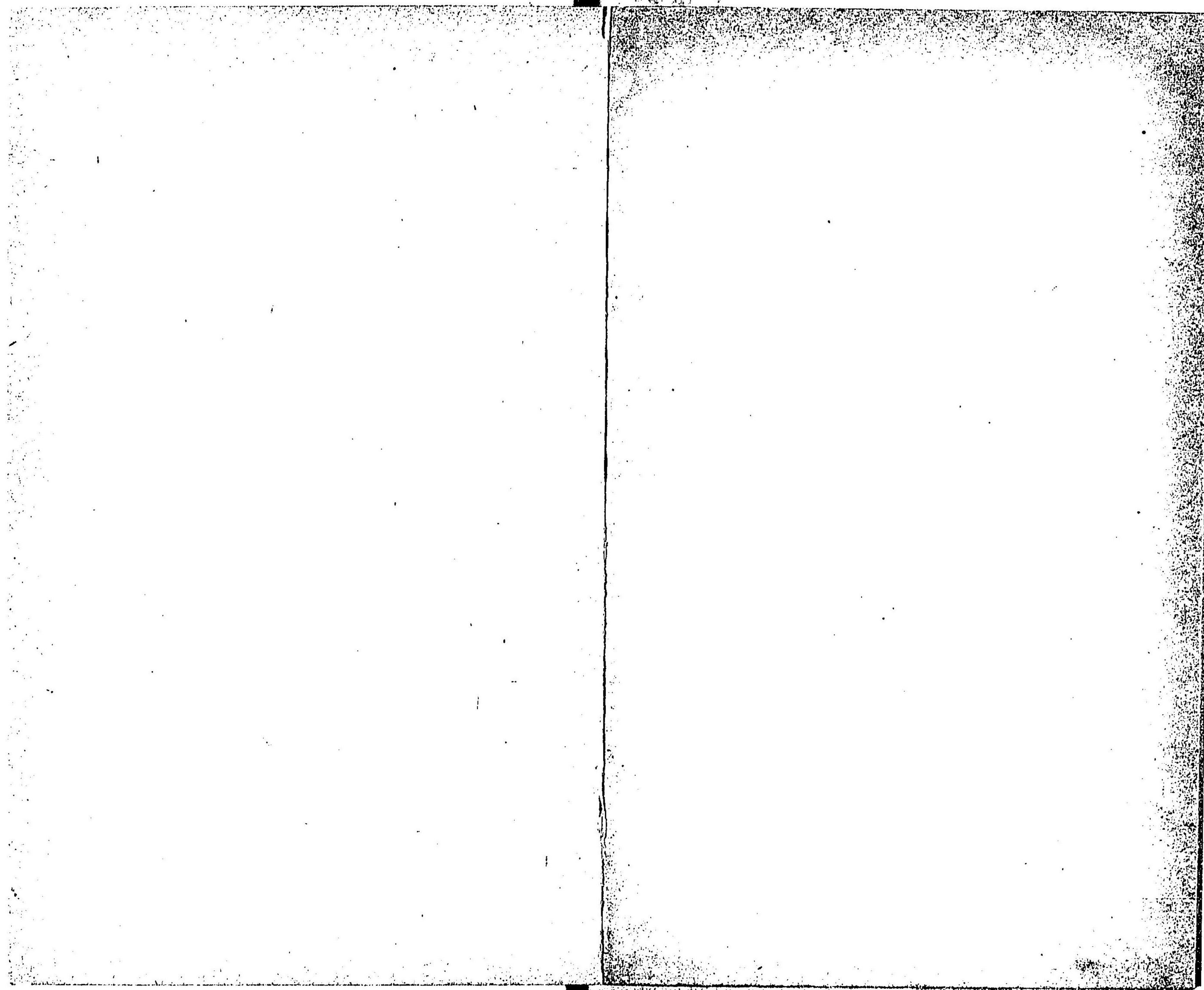
版権所有

發行者 深川區安宅町九番地 千葉秀成

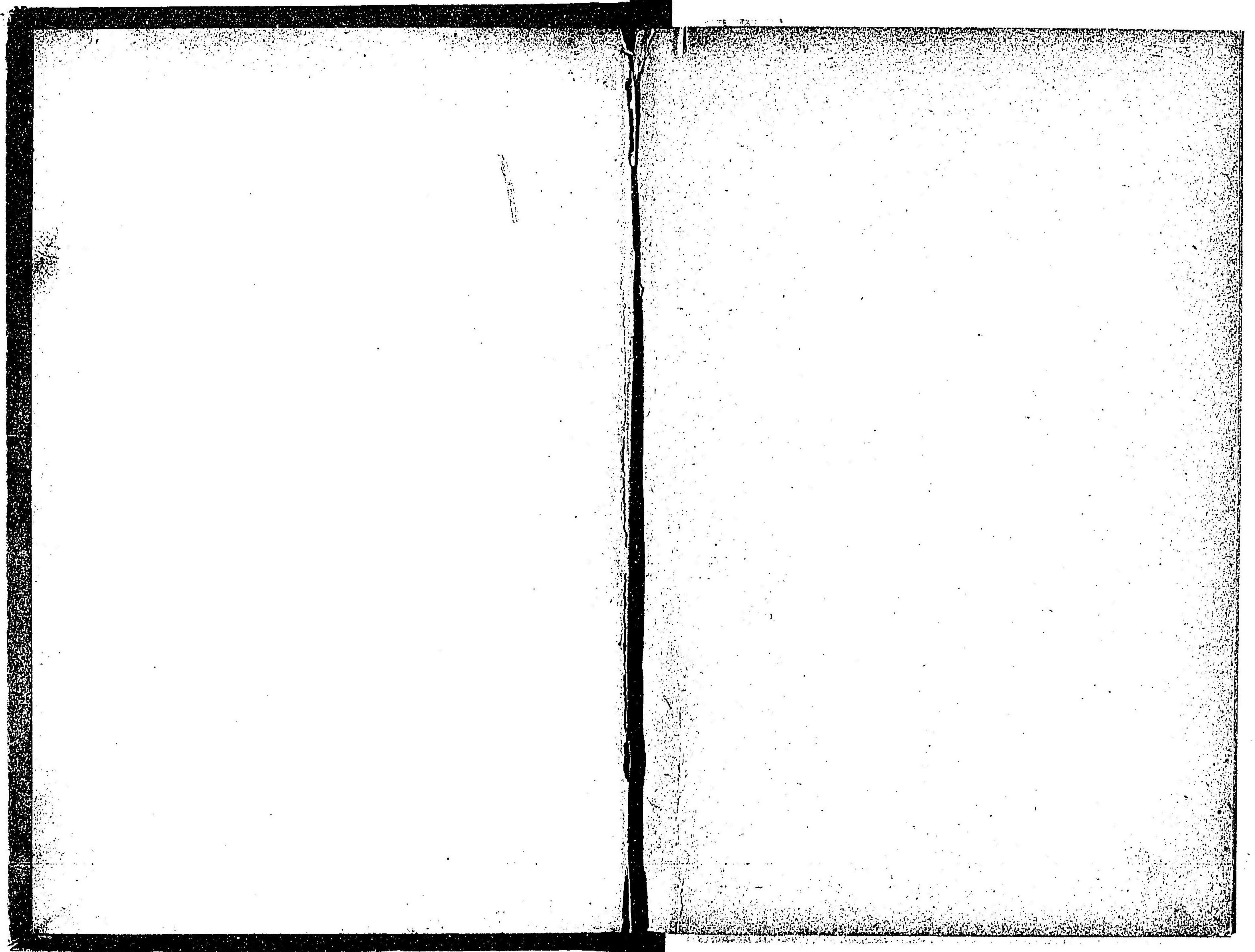
印刷者 京橋區采女町九番地 木村吉藏

發行所 京橋區銀坐二丁目六番地 好笑堂

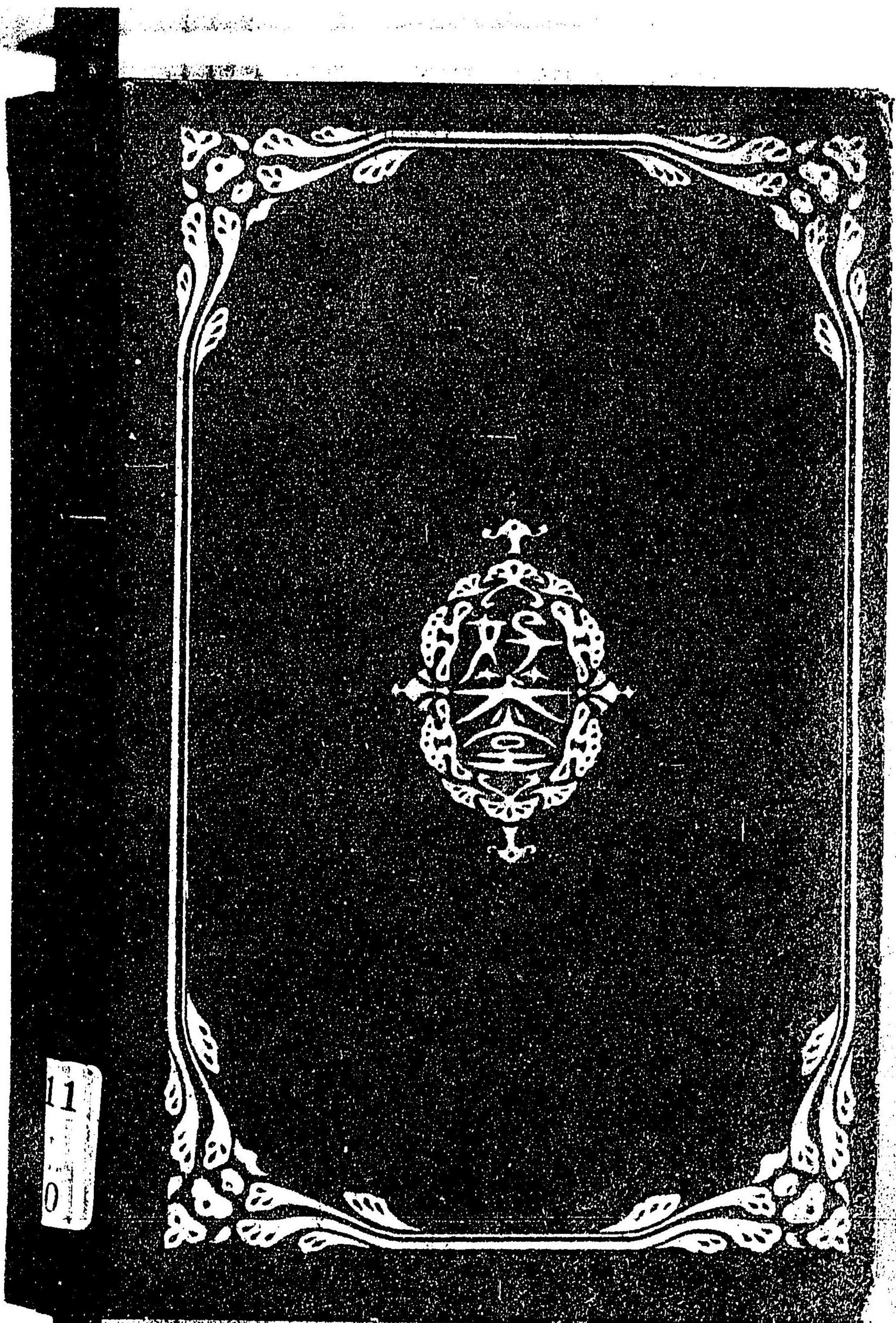












11  
0